

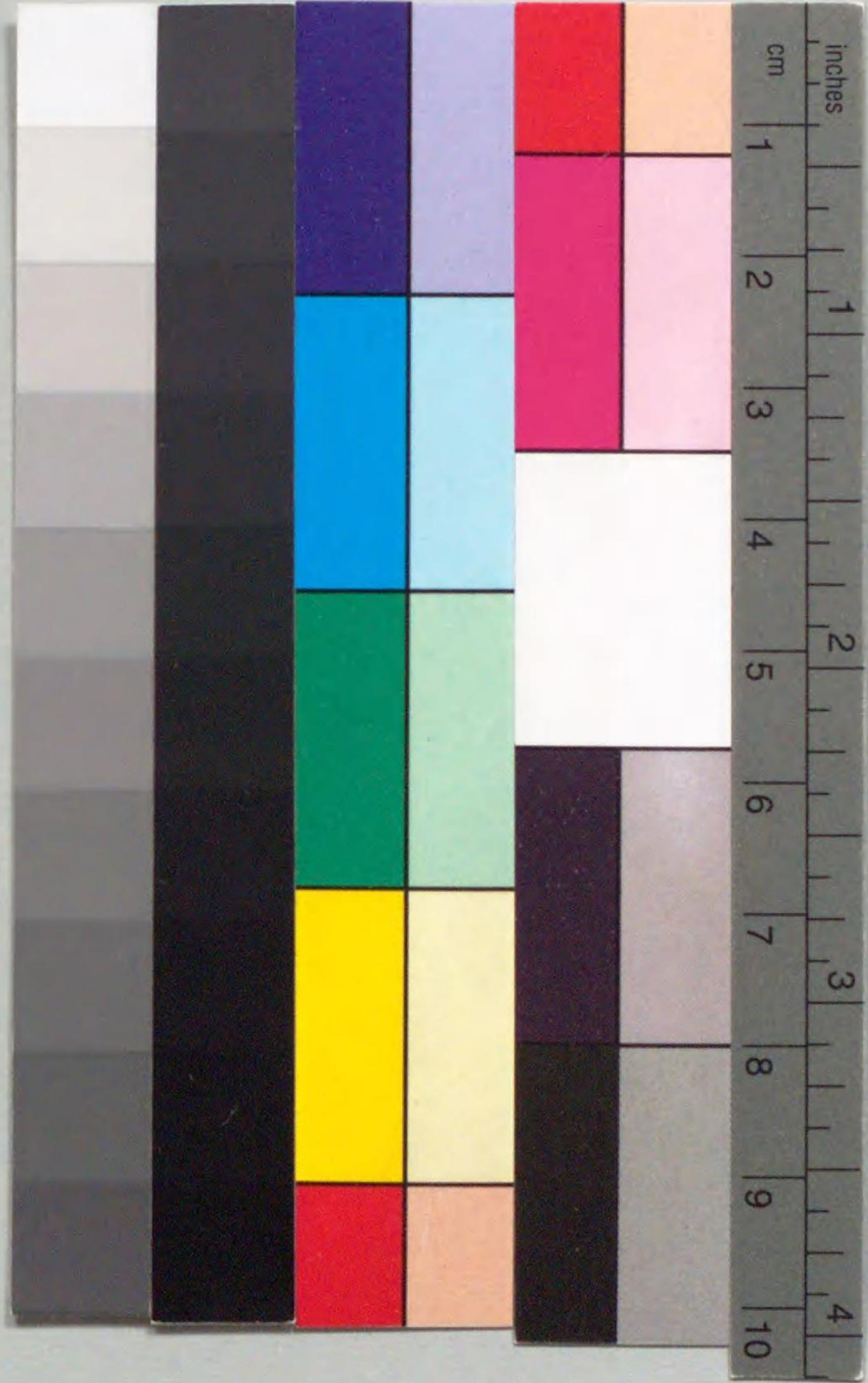
た
び
ま
く
ら

W125

256



79W28786



たびまくら

昭和九年十一月

姊

崎

正

治

正誤表

頁	行	誤	正
五	四	いつが来る	いつ来るや
六	一〇	いやもさびしき	さびしくもてる
一二	六	つり垂るる	つりを垂る
一五	四	いつが来る	いつ来るや
二三	二	軒のは	軒のへ
三三	四	かも	かな
四二	六	そもえ	そも点
六五	九	おもほゆる	おもふかな
八三	一	るるらん	るらん
九〇	一一	波うちよする	波のうちよす
一〇四	九	かなしさの	かなしさを
一〇四	一〇	入りく	またみ
一三〇	九	四人	三人
一三九	一二	いやも	いよよ
一五一	一〇	東	ゆふべ
一五五	七	あつ海	あつ風
一五六	四	しのぼるる	おもふかな

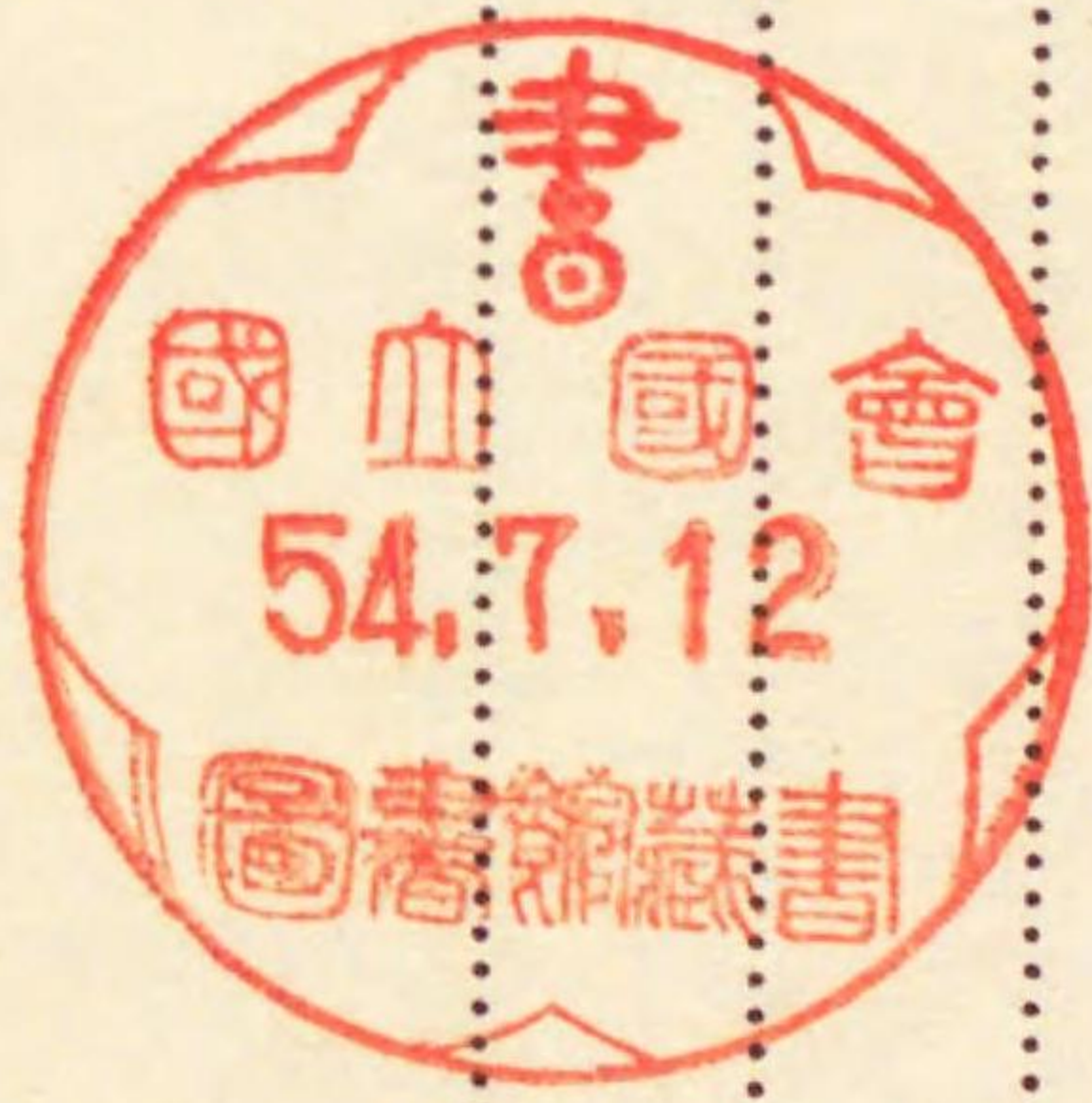
W125
256

王陽明百首……………一

王摩詰百首并外篇……………三四

雲波詠草(一)……………七九

雲波詠草(二)……………一〇〇



79W28786

王陽明百首

年來、旅路の友として王陽明詩鈔一部を携ふ、雨の車中、旅宿の閑居、見るに風物なく、語るに友なき折には、その一句二句、半首又一首、眼を開きては読み、眼を閉ぢては思ひ、心のゆくまゝにその情を和歌にうつして紙端にかきとゞむ、敢て譯すとは云はず、その趣を傳ふるのみ、このたびの北米行にも、車上船中、己が思をかきつくる外に、陽明の詩句を讀誦しては、又その心を和歌に綴る、會議歴訪の繁劇を過ぎて、カナダの廣野、北太平洋の航路、二旬の閑時に好機を得て、新材數十首を得、船中更に讀誦改修して王陽明百首とす、詞は歌をなすに足らずとも、靜思の中に先賢の雅懷を味ひ、異境の雨の日、風の夜、詩句を通して古人と語り合ひし思出深きを己が悦とす、

旅路には袖にをさむる陽明の
詩集と幾夜かたりあかしし

昭和八年九月廿七日

北太平洋、アラスカの沖にて

化城寺

一百六峰開碧漢 八十四梯踏紫霞

峯たかみそらに連なる山々の

はしをのぼればかすみをぞふむ

獨揮談塵拂烟霞 一笑天地真無涯

峯の上にかたらふひまにきりはれて

ほゝゑむまへにそらひらけ行く

登泰山

行々入煙霏 陽光散巖壑

霧わけてのぼる山路に日かげさし

ちりていはほにしるくうつらふ

凡軀無健羽 悵望未能歸

飛びぬべきつばさはなしと知りつつも

なほ去りかねて峯にたたずむ

飛歩凌煙虹 危泉瀉石道

岩のみちたどる足もといづみわき

虹をふみては雲にわけいる

千峯互攢簇 掩映青芙蓉

數々の峯のほさきのむらがりて

そらにはえがく碧芙蓉かな

遙聽紫鸞笙 雙吹入晴昊

四

青ぞらの見わたすかぎりさえわたり
はるかにひびく天の笛のね

遊 瑞 峯

溪山處々堪行樂 正是浮名未易拋

身は雲にまかせて山に入りながら
浮世のこゝろはらひかねけり

夜泊功德寺

一夜洞雲眠未足 湖風吹月渡溪清

あかつきの眠をさます濱風の
月のも吹きて谷わたりゆく

送守中至龍盤山中

何年穩閉陽明洞 槽拙山爐煮石羹

我がいほの柴の戸とざしほだの火に
きのこ煮ん時いつか來るらん

通天巖、次陳惟濬韻

四山落木正秋聲 獨上高峯望眼明

樹色遙連閩嶠碧 江流不盡楚天清
雲中想見雙龍轉 風外時傳一笛橫

四方山の落葉に秋のおとづれて

高ねのながめすみわたるかな

目もはるに木々のいろざり青ぞらに

つらなるあたり水くもに入る

五

雲のまにたつの舞ふかど見るうちに
いづこか風に笛の音のする

泊金山寺

風雨樓臺迥佛燈

鐘のねのいやにさびしき雨の夜に

みあかしの火のかせにひらめく

舟夜

隨處看山一葉舟 夜深霜月亦兼愁

ひと葉舟まごをひらけば風寒く

霜夜の月のいやもさびしき

登小孤書壁

人言小孤殊絶絶……映風閃壁船難進

よちがたき小孤せうこの峯のはざまより

吹きいづる風に水のたつまく

峰頭四顧盡落日 宛然風景如瀛寰

立ちつくし峯にゐるまに日はおちて

四方のながめのやみにとけ入る

奇觀江海詎爲險

世情平地猶多艱

嗚呼世情平地猶多艱

回瞻北極雙淚潺

けはしきは海山のみか人の世は

平つちにすら波たつものを

人の世のけはしき波にゆられつつ

星をあふげば目になみだみつ

立春

天涯霜雪嘆春遲 春到天涯思轉悲

おそしとて待ちにし春は來つれども

こゝろぞさむき安からぬ世の

次壁間杜牧韻

回首孤航又陳迹 疎鐘隔渚夜迢々

旅まくら歳をかさねし船のうち

こゝろひかるゝ夕暮のかね

舟過銅陵埜、縣東小山有鐵船

青山滾々如奔濤 鐵船何處來停機

山々の大波なせるただ中に

いづこより來し岩の大船

雷師鼓舵虹爲鏢 弱流萬里不勝芥

年をへし岩の大船にじにのり

いかづちはせていづこ行くらん

觀九華龍潭

飛流三百丈 瀕洞祕靈湫

吾欲鞭龍起 爲霖遍九州

天くだるこの大瀧のたつとなり

そらかけ行くにわれや乗らまし

廬山東林寺

我歌白雲聽者寡 山自點頭泉自瀉

白雲をわれひとりうたふ歌につれ

峯はうなづき水おのづわく

坐俯西巖窺落日 風吹孤月江東來

日にはしに峯ふきわたる松風の
招きよせしかひむがしの月

九華芙蓉閣

夜半峰頭掛明月 宛如玉女臨粧臺

山のはにかゝる月影そらしるく
かがみにむかふ玉の乙女子

登雲峰望始盡九華之勝

極目奇峰那有數 巨壑中藏萬玉林
大劍長槍攢武庫 ……

目もはるに峯のかずかず形かへ
すがたつくして立てるこの山

槍の岩つるぎの峯や玉の岳

神かみたまかこゝにすむらん

雪望

風雪樓臺夜更寒 曉來霽色滿山川
當歌莫放陽春調 幾處人家未起烟

雪の夜のあけてはれゆくそら見れば
世は白たへにけぶりだもなし

歸興

歸去休來歸去休 ……
青山待我長爲主 白髮從他自滿頭
種菓移花新事業 茂林脩竹舊風流
多情最愛滄州伴 日々相呼理釣舟

歸らなん歸りてやすまなん山青し

かしらのかみは白くなるとも

歸らなん歸りてやすまなんわが庭の

しげみのそばに花うつすべく

歸らなん歸りてやすまなん川の洲に

舟つくらひてつり垂るるべく

題歲寒亭

一覺紅塵夢欲殘

江城六月滯風湍

人間炎暑無逃遯

歸向山中臥歲寒

世のちりにまみれし夏の夢さめて

山のすゞ風身にしみわたる

獄中詩

不寐知夜永 驚風起林木

秋の夜のねられぬまゝにわが思

野面ふくかせにつれてゆらめく

深谷自逶迤 煙霞日悠永

めぐる谷たなびく霞さながらに

ながめて人の世にすみなまし

耿彼屋漏 天光入之

瞻彼日月 何嗟及之

いましめの室にもれくる日の光

心をさそふおほぞらのかげ

倏晦倏明 凄其以風

倏雨倏雪 當晝而蒙

ひるとよる雨と雪とのわかちだに

ねおきのひまにかすかにぞ知る

朝既式矣 日既夕矣
悠悠我思 曷其極矣

夜はあけぬ日またくれぬいましめの
思はながくつくべくもなく

讀 易 (獄中作)

俛仰天地間 觸目俱浩々

あめつちの姿に心とめて見よ

身のうきぐものなにさはるべき

見 月 (獄中作)

屋罅見明月 遠見地上霜

すさまもる月影すごくさし入りて

わがころもでに霜ぞおきける

匪爲嚴霜苦 悲此明月光
盈虛有天運 嘆息何能忘

霜しらみ月かげこほるいましめの

冬につぐ春いつか來るらん

天 涯 (獄中作)

天涯歲暮冰霜結 思家有淚仍多病

歳くるる霜夜のそらのほし見れば

なみだもこほるわが思かな

屋 罅 月 (獄中作)

幽室不知年 夜長晝苦短

但見屋罅月 清光自虧滿

いましめの室に年をも知らねども

影にしらるる月のみちかけ

赴謫詩

北風春尙號 浮雲正南馳
風雲一相失 各在天一涯

春ながら風なほさむくちりちりに

とぶ雲いつかまたもあはめや

君莫歌五詩 歌之増離憂

わかれちに歌なうたひそ我がために

たびちのそらにおもひますらん

憶與美人別 惠我雲錦裳

錦裳不足貴 遺我冰雪腸

別路にたまひしころも着ながらも

かなしき思に身はこほりぬる

一日復一日 去子日以遠

嘗嗤兒女悲 憂來仍不免

別れては日毎ひとごとにとほざかる

おもひに我も女々しかりけり

中夜不能寐 起視江月光

中情良自抑 美人難自忘

小夜なかにねられぬまゝに月見れば

こひしきおもひいやまさりけり

風吹葦葭雪 飄蕩知何處

風につれ岸邊の芦もわが思ふ

人のかなたに飛びやゆくらん

美人有瑤瑟 清奏含太古

高樓明月夜 惆悵爲誰鼓

月きよき夜半に君をししのぶとき

水のかなたに琴のねのする

因雨和杜韻

幾人燈火坐黃昏 客途最覺秋先到

旅にしてこの夕ぐれの雨のそら

秋は來つるとつみぞしらるる

泛海

嶮夷原不滯胸中 何異浮雲過太空

夜靜海濤三萬里 月明飛錫下天風

人の世の浮雲はれてうなばらに

月てりわたるわが心かな

廣信元夕蔣太守舟中夜話

何處忽談塵世外 百年惟此月明中

旅にしてさびしきうちに君ととも

月きよき夜をかたりあかしぬ

泊石亭寺

江洲春樹何青々 烟霞故國虛夢想

たをやかに緑はぐくむ木々見れば

夢にぞうかぶふるさとの春

雜詩

羊腸亦坦道 太虚何陰晴 ……

聖訓垂明々 拜舞詎踰節 ……

夜深向晦息 始聞風雨聲

くもりては又はるるなる天地の

ゆきかふ道ぞ人の世のつね

いにしへの文にこゝろはをざりつつ
耳をすませば夜半の風の音

夜宿宣風館

天際浮雲生白髪 林間孤月坐黄昏

うき雲のゆくへながめてたたずめば

いつしか木のまにかゝる月かげ

去婦嘆

春花不再艷 顏魄無重圓 新歡莫終恃

新妻のたのしき時もつかのまに

かへるすべなくすてられし花

依違出門去 欲行復遲々

鄰姬盡出別 強語含辛悲

去りかねてかごと出づれば人みな

ことばは耳にわれひとり行く

去矣勿復道 已去還躊躇

思はじと別れきつれど君の身の

なほ思はれて足もすゝまず

岡回行漸遠 日落群鳥飛

群鳥各有托 孤妾去何之

鳥さへもかへる時はあるものを

よるべなき身のいづこ行かまし

空谷多凄風 樹木何蕭森

浣衣澗冰合 採苓山雪深

水こほる谷にそゝぎつ雪のなか

芹をつみつゝそら仰ぎ見つ

憂思托鳴琴 朝彈別鶴操
暮彈孤鴻吟 彈苦思彌切
あしたには鶴のわかれやゆふべには
はなれ小鳥のかなし琴の音

羅舊驛

客行日々萬峰頭 山水南來亦勝遊
身在夜郎家萬里 五雲天北是神州

⋮

千よろづの峯山こえてみんなみに
來てはみやこの北のこひしき

秋夜

樹暝栖翼喧 螢飛堂夜靜
遙穹出晴月 低簷入峰影

鳥の音もしづまりはてぬたそがれに
はやくも月の軒のはにてる

陸廣曉發

雨痕新霽渡頭沙 溪深幾曲雲藏峽
白鳥去邊迴驛路 青崖缺處見人家

⋮

雨はれて河のわたしに朝日さし
ゆくての森に白鷺のとぶ
雲はまだ山のはざまにさまよへど
このまの村に家のしるけき

元夕

故園今夕是元宵 獨向蠻村坐寂寥
みやこには新玉のとし祝ふけふ
ひなのすまひのわれぞわびしき

去年今日臥燕臺 銅鼓中宵隱地雷
炎荒萬里頻回首 羌笛三更謾自哀
……
こぞのけふ雲居の宮のいとたけに
くらべてあはれひなの笛の音

贈劉侍御

知君已得虛舟意 隨處風波只晏然
波もひけ風もいざなへ捨小舟
行くにまかするわが心かな

月下吟

江天月色自清秋 不管人間底許愁
月きよみ水にも秋の音づれて
物思ふ人に澄めと告ぐらし

書庭蕉

簷前蕉葉綠成林 長夏全無暑氣侵
但得雨聲連夜靜 不妨月色半床陰
窓ちかき芭蕉のしげみ雨たれて
夏もすゞしき夕立のあと

別方叔賢

道本無爲只在人 自行自住豈須鄰
道はもとおのづからなるあめつちに
さらに求めて道なたづねそ

別易仲

一悟失群闇 秋風洞庭波
洞庭とらていの水には秋のおとづれて
心もきよくそらすみわたる

送德觀歸省

瑯琊雪是故園雪 故園春亦瑯琊春

ふるさに君かへりても雪と花
わが住む方にかよふとぞ知れ

山中示諸生

共探花源莫厭深 鳴鳥遊絲俱自得

みなかみの花をもとむる道の邊に
心ありげにもろごりの鳴く

桃源在何許 西峰最深處
不用問漁人 沿溪踏花去

みやまぢをたごれば花の泉わく
その水上をよそにもとむな

溪邊坐流水 水流心共閒

谷のへに流れながめてたたずめば
こころのどかに水もながるる

龍潭夜坐

何處花香入夜清 石林茅屋隔溪聲

幽人月出每孤往 棲鳥山空時一鳴
谷川のながれにつれて吹く風の
もたらす香り花はいづこぞ

山の邊に月を友とし獨りをれば
鳥のひとこゑそらわたり行く

送蔡希顔

野寺同遊詣 春山共攀援

山に谷あかつき夕べもろともに

むすびし心いつはなるべき

之子丹霞姿 辭我雲門去

君はこれ霞のすがたここを去り

人にわかれて雲にいるらん

緊予辱風塵 送子媿雲霧

塵の世をさけて山邊をくもきりの

したふに似たる君とわれかな

棲雲樓坐雪

纔看庭樹玉森々 瓊花入座能欺酒

園の木に玉をつらねてふる雪を

ながむるあたり花と飛びくる

玉樹有花難結果 天機無線可通針

玉の木に花をさかせど實はならぬ
雪こそそらの織のはたなれ

山中懶睡

石床風細不生塵 又見峰頭上月輪

人里をはなれて岩のどこの上に

ねむりさむれば山のはの月

溪雲漠々水冷々

霧こめてあやめも分かぬ谷間にも

水ひややかにながれてやまず

次欒子仁韻

道聽途傳影響前 莫道青山不解言

道を説き人にかたれど人きかず

山にかたれば山はうなづく

遠公講經臺

臺上又無師子吼 野狐復時聽經來

そのかみの師子吼のあとの岩の邊に
のりきかんとて狐くるかも

登蓮華峯

夜半花心吐明月

はちす花みねにさきいで玉を吐き
そらにかくるか峯のはのつき

夜宿天池月下聞雷

天池之水近無主 水魅山妖競偷取
公然又盜山頭雲 去向人間作風雨

山彦のぬすみだしけん天の水
雨をふらしていかづちの鳴る

睡起偶成

四十餘年睡夢中 起向高樓撞曉鐘

四十とせのはかなきねむりさめやらで

ふためき打つやあかつきの鐘

起向高樓撞曉鐘 尙多昏睡正懵々

ふためきて鐘をつけども世の人の

さめぬは耳のしひしなるかも

夜坐

獨坐秋庭月色新 幽意自隨流水春

ひとりして秋の夜にすむ月見れば

くもりは心のほかなかりけり

詠良知示諸生

箇々人心有仲尼 自將聞見苦遮迷

おのがじし心にひじりあるものを

外に見んとてなやみぬるかも

萬花根源總在心 枝々葉々外頭尋

さきいづる花はこゝろの根にあるを

えだ葉のすると見まがひにけり

抛却自家無盡藏 沿門持鉢效貧兒

心こそつきせぬ玉のくらなるに

外にむかひてたから乞ひけり

長安有路極分明 何事幽人曠不行

人の世の道はたひらにあるものを

岨ふみなやむ人のあやふき

寄石潭

知公久已藩籬撤 何事深林尙閉關

世をすてて山を友としゐる人の

なに柴の戸をさらにとざすぞ

王摩詰百首

今年の行、王右丞詩集を携へて旅路の友とす、兩大陸三大洋旅窓の閑には讀誦しつつ、例の如くその意を和歌につゞる、右丞王維摩詰は畫家にして詩人、又悟道の高士、その詩を誦しては、山水花卉眼に映じ、物外の逸趣心に浮ぶ、文化危機の現時、外遊繁劇の間にありて之を味へば、脱俗の意、超世の心、油然として湧くを覺ゆ、旅路の思出に加へて、王摩詰百首を集め、外篇二十首と併せて記念とす、

畫と歌のひとつみなかみわきいでし

むかしのいづみ今もつきせず

あめつちを畫とながめにし君の歌

うつすに筆のちからおよばず

昭和九年十月七日

京都東山にて

胡居士臥病遺米因贈

了觀四大因 根性何所有

聊持數斗米 且救浮世取

身のやむといふも浮世のゆめながら

浮身のしろに米まゐらする

林園即事

松含風裏聲 花對池中影

松風はみそらの聲をねにいだし

花はすがたを水にぞうつす

秋夜獨坐

夜靜群動息 蟬蛄聲悠々

庭槐北風響 日夕方高秋

きりぎりすしづけき夕に聲そえて
風に木のはのちる音きこゆ

和使君五郎西樓望遠思歸

故郷不可見 雲水空如一
ふる里はかなたながらに見えわかず
水とくもとのそらをとざして

齊州送祖三

天寒遠山淨 日暮長河急
解纜君已遙 望君猶佇立
ともづなをときてゆく君みおくれば
ながれはとほく夕やみに入る

華嶽

西嶽出浮雲 積雪在太清
連天凝黛色 百里遙青冥
白日爲之寒

雲をぬきそらにつらなる峯青く
さえぬみ雪に日もひえぬらん

藍田山石門精舍

朝梵林未曙 夜禪山更寂
あけやらぬ山のみ寺のしづけさは
徹夜三昧さんまいのこゝろなるらん

李處士山居

背嶺花未開 入雲樹深淺
清晝猶自眠 山鳥時一囀

木のまには雲のさまよふ山のいほに
まごろみさます山鳥のこゑ

渭川田家

斜陽照墟落 ……………

田夫荷鋤至 相見語依依

夕日さすくろのみちべに村人の
鋤をになひて立ちがたりする

春中田園作

屋上春鳩鳴 村邊杏花白 ……

歸燕識故巢 舊人看新歷

梨すもも咲きもみだるるゐなか屋の
やねにひかりをあびて鳩なく

つばくらの古巢たづねてかへりくる
春のひよりに野面あらたなり

韋侍郎山居

閑花滿巖谷 瀑水映杉松

世をよそに谷まの花を友として
たきにうつらふ松とかたらふ

飯覆釜山僧

果從雲峰裏 顧我蓬蒿居

籍草飯松屑 焚香看道書

雲の峰おりてきましし僧たちに
香をたきつつ飯ぼんたてまつる

謁璿上人

少年不足言 識道年已長
夙承大導師 焚香此瞻仰
のりのみち年へてこゝに室しつに入り
香をたきつつ師をあふぎ見る

苦熱

赤日滿天地 火雲成山嶽
草木盡焦卷 川澤皆竭涸
やけ雲は峯とかさなり川かはき

草木とともに人もかれなん

思出宇宙外 曠然在寥廓
長風萬里來 江海蕩煩濁
あつき日も思ひをそらにはせて見よ
なやみは風にちりてきえなん

納涼

喬木萬餘株 清流貫其中
前臨大川口 豁達來長風
清水たに森のしたかげ流れきて
江がはのきしにすす風のふく

羽林騎閨人

秋月臨高城 出門復暎戸
行人過欲盡 狂夫終不至
夜はふけてゆく人まれに月ととも
かごをまもれど君かへりこず

桃源行

兩岸桃花夾去津 坐看紅樹不知遠
行盡青溪不見人

桃源のはてしもしらぬ花の雲

水にうつりて人かげもなし

送崔五太守

劔門忽斷蜀川開：天際澄江巴字回

そびえたつ劔門のかなたたちまちに

水のながれのもえなす見ゆ

送友人歸山

山中人兮欲歸

雲冥冥兮雨霏霏

……

山萬重兮一雲

君ゆくや君のゆくへは山にして

かさなる峯のしらくものなか

魚山神女祠歌

坎坎擊鼓

魚山之下

吹洞蕭

望極浦

女巫進

紛屢舞

……

神之來兮不來

つづみうち笛ふくみこの舞につれ

神のみたまのくだりますか

紛進舞兮堂前

……

悲急管兮思繁絃

神之駕兮儼欲旋

倏雲收兮雨歇

山青々兮水潺潺

まひをさめ悲き笛のふきやめば

きえゆく雲にのこるあを山

從岐王夜宴衛家山池

山月少燈光

積翠紗窗暗

月のよに宮ゐのあかしうすぐらく

かすかになびく窓のうすぎれ

輞川閑居

寒山轉蒼翠 秋水日潺々
倚杖柴門外 臨風聽暮蟬

山あをみ秋の水すむ野をゆけば

風のつたふる夕せみの聲

渡頭餘落日 墟里上孤煙

河の洲に夕日かすかにのこるとき

孤村のけむりさびしくもたつ

寄荊州張丞相

目盡南飛雁 何由寄一言

君をしのびかりの南へゆく見ては

ことばをよせんすべをしぞ思ふ

冬晩對雪憶胡居士家

隔牖風驚竹 開門雪滿山

雪つもるしづけき庭の窓のそと

風におごろく竹のおとす

藍田別業

唯有白雲外 疎鐘聞夜猿

わがいほは世を白雲のほかにして

かねの音かすかにましらよるなく

暮宿琴臺朝躋書閣

舊簡拂塵看 鳴琴候月彈

ふるき文ちりを拂ひてひらき見つ

月ながめては琴をこそひけ

空谷歸人少 青山背日寒
美君棲隱處 遙望白雲端
谷の戸はくる人まれにのきばには
山のはいづるしらくもをみる

酬賀四贈葛巾之作

野巾傳惠好 思君共入林
たまひにし葛のころもを身につけて
君おもひつつはやしにぞ入る

送衡嶽瑗公南歸

白雲留故山 綻衣秋日裏
洗鉢古松間 一施傳心法
白雲をあとにのこしてみほとけの
衣鉢を人にしめす君かな

遊李山人所居因題屋壁

世上皆如夢 狂來止自歌
問年松樹老 有地竹林多
夢の世をすてて心のゆくままに
松の老木をともとする君

過福禪師蘭若

巖壑轉微逕 雲林隱法堂
羽人飛奏樂 天女跪焚香
木のしげみこみちの奥の法堂に
天人恭敬座にやつらなる

過香積寺

不知香積寺 數里入雲峰
古木無人逕 深入何處鐘

峰にくも木のまわけ入る人まれに
いづこともなく鐘のねきこゆ

過感化寺曇興上人山院

谷鳥一聲幽 夜坐空林寂
松風直似秋

谷まには鳥のひところゑ山ふかく
しづけきもりに松風のおと

秋夜對雨

促織鳴已急 ……
寒燈坐高館 秋雨聞疎鐘
秋さめのそぼふる中にきりぎりす
なきやむひまに鐘かすかなり

終南別業

行到水窮處 坐看雲起時
偶然值林叟 談笑無還期
山川のながれたごりてたゝすめば
はざまをいづる雲ぞ友なる
これもまた雲を友なる山がつと
かたりあひては時わすれけり

歸嵩山作

流水如有意 暮禽相與還
荒城臨古渡 落日滿秋山
落日ちくじつのさびしくてらす荒城からじやうの
すそをながるる水こゝろありや

涼州郊外遊望

野老纒三戸 邊郵少四鄰
簫鼓賽田神 婆娑依里社

野面ひろく家まばらなる村のもり

田の神まつる笛の音のする

春日上方即事

柳色春山暎 梨花夕鳥藏
閑坐但焚香 北窗桃李下

春の野をひとりながむる窓のへに

花のしたかげ香たきて坐す

漢江臨汎

江流天地外 山色有無中
波瀾動遠空 郡邑浮前浦

山とほく流れはそらにつらなりて

波うごくへに村うきて見ゆ

汎前陂

秋空自明廻 況復遠人間
兼之雲外山 暢以沙際鶴

澄波澹將夕 清月皓方閑

此夜任孤權

人里をはなれし秋の水のうへ

たづとぶそらに雲はるかなり

たそがるる水に月かげさしそめぬ

こよひぞひとり舟うかべてん

使至塞上

大漠孤煙直 長河落日圓

しづむ日の砂の大野に入るあたり
ますぐにのぼる煙さびしき

秋夜獨坐

獨坐悲雙鬢 空堂欲二更
雨中山果落 燈下草蟲鳴
……
唯有學無生

秋のよに虫のなくねを友として

あかしさびしく鬢のしも見る

秋さめの夜長にひとり人の世を

おもへば我も無生むじやうならまし

聽宮鶯

春樹遶宮牆 宮鶯轉曙光
……
隱葉棲承露 攀花出未央

御園生の花にたはむれ葉にかくれ

宮居のうぐひすそこここになく

過始皇墓

古墓成蒼嶺 幽宮象紫臺
……
無春雁不廻 更聞松韻切
いかめしき御墓もいまは木のしげみ
松風のみぞしめやかにふく

送祕書晁監還日本國

積水不可極 安知滄海東
……
萬里若乘空 向國唯看日
船出して君がゆくの水そらに
つらなるあたり日のいづる國

青龍寺曇辟上人兄院集

青山萬井外 落日五陵西
眼界今無染 心空安可迷

山とほみ入日はるかにすむ空の
心に君のこゝろぞ似たる

過盧四員外宅看飯僧共題

寒空法雲地 秋色淨居天
不須愁日暮 自有一燈然
のりの雲そらにながむるたそがれに
こゝろのひかりおのづからてる

投道一師蘭若宿

鳥來還語法 客去更安禪

鳥くればのりをかたらひ人されば
山にこゝろをすます君かな

秋日懸清光

寥廓涼天靜 晶明白日秋
圓光含萬象 碎影入閑流
すむ秋のそらてる日影ほがらかに
水にくだけて玉とちりぬる

東谿玩月

月從斷山口 遙吐柴門端
光連虛象白 氣與風露寒
谷靜秋泉響 巖深青靄殘
月かげをやごす大ぞら白くすみ
つゆをふくめる風のつめたき

谷間にはいづみのおとも秋をつげ
岩間にもやのあをくたなびく

過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若

嵩丘蘭若一峯晴 食隨鳴磬巢鳥下

晴峯せいほうをのぞむ蘭若らんにやの食堂じきだうに

ひゞく磬けいの音ときつげわたる

春日與裴廸過新昌里訪呂逸人不遇

桃源一向絕風塵 ……

看竹何須問主人 城上青山如屋裏

世を外の君がすみかをたづねきて
山をながめつ水と去りゆく

酌酒與裴廸

…

酌酒與君君自寬 人情翻覆似波瀾
花枝欲動春風寒 世事浮雲何足問

人ごころゆらめく波ににるなかに

君とさかづきはすゆたけさ

木ずるには花をふくめど春さむし

風のゆききに雲はとびつつ

輞川別業

雨中草色綠堪染 水上桃花紅欲然

雨そゞぐ草はあらたにみどりそめ

水には桃のくれなるのもゆ

早秋山中作

寂寞柴門人不到 空林獨與白雲期

人もこず虫のねしげきわが庵は
かれ木のもりに白雲を友

聽百舌鳥

上蘭門外草萋々 未央宮中花裏栖
拂曙能先百鳥啼 萬戸千門應覺曉
もろごりにさきだち森に御園生に
あかつき告ぐるもづのなき聲

班婕妤三首

玉窗螢影度 金殿人聲絶
秋夜守羅帷 孤燈耿不滅
人もなき宮居のまごに螢とび
ねやのとばしびさびしさをます

宮殿生秋草 君王恩幸疎
那堪聞鳳吹 門外度金輿

わが庭に秋草しげみわが君の
よそのいでましきくぞうたてき
怪來妝閣閉 朝下不相迎
總向春園裏 花間笑語聲
よそほひもつくらすねやもかきみだし
わらふ聲をばあなたにぞきく

朝川集

欒家瀬

颯々秋雨中 淺々石溜瀉
跳波自相濺 白鷺驚復下

雨そゞぐ淺瀬の石に浪たちて
鷺もとまらずまごひつつとぶ

白石灘

清淺白石灘：浣紗明月下

清き瀬のあさきそこには石しろく
岸にそゞげば月のてりそふ

竹里館

獨坐幽篁裏 彈琴復長嘯
深林人不知 明月來相照

たかむらのしげみにひとり琴ひけば
人はこねごも月てらしくる

辛夷塢

木末芙蓉花 山中發紅萼
澗戸寂無人 紛々開且落

人もこぬ山の谷間にひとりさく
芙蓉の花びらおのづからちる

蓮花塢

日々采蓮去 洲長多暮歸
弄篙莫濺水 畏溼紅蓮衣

舟のさを心してさせくれなるの
はちすの花を水けがさじと

萍池

春池深且廣 會待輕舟廻
靡々綠萍合 垂楊掃復開

竿さしてめぐる池の面うき草の
みごりをなでて柳えだたる

山中寄諸弟妹

山中多法侶 禪誦自爲群
城郭遙相望 唯應見白雲

經をよみ法の友ごちつごひゐる
浮世をほかのしらくものなか

聞裴秀才廸吟詩因戲贈

猿吟一何苦 愁朝復悲夕
莫作巫峽聲 腸斷秋江客

いたづらに巫峽のましらまなばざれ
きゝてこゝろを人やいためん

別輞川別業

依遲動車馬 惆悵出松蘿
忍別青山去 其如綠水何

青山にこゝろのこしつ木につたに
わかれつげつゝためらひて行く

紅牡丹

綠艷閑且靜 紅衣淺復深
花心愁欲斷 春色豈知心

あさきこき花のくれなる葉のみごり
春のこゝろはしとやかにこそ

左掖海棠

閑灑階邊草 輕隨箔外風
黃鶯弄不足 銜入未央宮

玉の宮きよきみはしに花ひとつ
たはむれめぐる鳥のもちきし

菩提寺禁口號

安得捨羅網 拂衣辭世喧
悠然策藜杖 歸向桃花源
世のあみをのがれて人のちり拂ひ
泉たづねて杖をひかまし

雜詩

已見寒梅發 復聞啼鳥聲
愁心視春草 畏向塔前生
花わらひもろごり歌ふ春くれば
草やそのふにおひしげりなん

崔興宗寫真詠

畫君年少時 如今君已老
今時新識人 知君舊時好
若かりし君が畫すがたうつしてし
ふるきよしみの更におもはる

哭孟浩然

故人不可見 漢水日東流
借問襄陽老 江山空蔡州
いづこぞと歸らぬ君をおもほゆる
ながれし水のあとおふがごと

闕題二首

荊谿白石出 天寒紅葉稀

秋ふかみもみちもちりて木の間には
 谷瀬のいしのあらはにぞ見ゆ
 相看不忍發 慘淡暮潮平
 語罷更携手 月明洲渚生
 わかれかねともに磯邊にかたらへば
 みちくる潮に月のともなふ

田園樂

厭見千門萬戸 崆峒散髮何人
 たちならぶ都おほちを夢とけし
 風にふかれて谷間さすらふ
 山下孤煙遠村 天邊獨樹高原
 ふもとなる村の煙をよそにして
 峯のひとつ木ちかきわがいは

桃紅復含宿雨 柳綠更帶朝煙
 花落家童未掃 鶯啼山客猶眠
 花につゆ柳にもやのかゝるとき
 まごろみつゝもうぐひすをさく

送元二使安西

渭城朝雨浥輕塵 客舍青青柳色新
 勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人
 雨ばれのみごりのかげに盃を
 かさねよ友はこゝをかぎりの

送韋評事

遙知漢使蕭關外 愁見孤城落日邊
 おもひやる君がゆくての大野原
 入日さびしき孤城のほどり

靈雲池送從弟

金杯緩酌清歌轉 畫舸輕移艷舞回
自歎鶻鴒臨水別 不同鴻雁向池來
酒をくみ歌ひつまひつ君をおくる
またもあふ日をいつと知らねば

與盧員外象過崔處士興宗林亭

綠樹重陰蓋四鄰 青苔日厚自無塵
科頭箕踞長松下 白眼看他世上人
しづけくも松のしたかげ苔のうへ
浮世をよそにこゝろかたらふ

寒食汜上作

廣武城邊逢暮春 汶陽歸客淚沾巾
落花寂々啼山鳥 楊柳青青渡水人

花はちり緑はたけてそゞろにも

たびちの春のなごりをしまる

戲題磐石

若道春風不解意 何因吹送落花來

心なく春風ふくと人いへごと

花をさそひてくるは何ゆへ

菩提寺禁

裴廸來相看、說逆賊等凝碧池上作音樂、供奉
人等、舉聲便一時淚下、私成口號、誦示裴廸
萬戶傷心生野煙 百寮何日更朝天
秋槐落葉空宮裏 凝碧池頭奏管絃

君まさぬ宮居のにはに落葉みち
民のこゝろにさむ風のふく

大君を宮るにあふぐ日はいつか
うたて御園にしこの絲竹

歎 白 髮

宿昔朱顔成暮齒 須臾白髮變垂髻
一生幾許傷心事 不向空門何處銷
いつしかに老はしらがにあらはれつ
この世のほかの道もとめよと

伊 州 歌

清風明月苦相思 蕩子從戎十載餘
征人去日殷勤囑 歸雁來時數附書
かりがねの文をもたらすばかりにて
かせまたつきの君しのばする

送 殷 四 葬

送君返葬石樓山 松柏蒼々賓馭還
埋骨白雲長已矣 空餘流水向人間
なきからをおくりて峯の白雲に
われ入りながらまた世にかへる

疑 夢

莫驚寵辱空憂喜 莫計恩讐浪苦辛
黃帝孔丘何處問 安知不是夢中身
恩とあださかえおとろへ常なきに
こゝろいたむな夢ならでやは

*

*

*

*

*

外篇

(王摩詰集に入るも、作さして疑あるものの中より、別に二十首を録す)

淮陰夜宿二首

水國南無畔 扁舟北未期
鄉情淮上失 歸夢郢中疑

水のうへにさすらふ旅のはてしらず

夢にもにたるふるさとの影

秋風淮木落 寒夜楚歌長

秋風のふく水のへに木の葉ちり

夜さむにひなの歌ながくひく

下京口棗夜行

南溟接潮水 北斗近鄉雲
行役從茲去 歸情入雁群

南さす八重のしほぢに北のそら

雲をながめてこひしふるさと

山行遇雨

驟雨晝氛氳 空天望不分
暗山惟覺電 窮海但生雲

雲むして山にかゝると見るうちに

いなづまふくむ黒雲のうみ

遊春曲二首

上苑無窮樹 花開次第新
香車與絲騎 風靜亦生塵

たちならぶ御そのの木々に花ひらき

みくるまのわたち砂かるくたつ

萬樹江邊杏 新開一夜風
滿園深淺色 照在綠波中

江にのぞむよろづの花のさきいでて
色とりごりのみどり波うつ

送春辭

日日人空老 年年春更歸
相歡在尊酒 不用惜花飛

日に年に人は老いても春はくる
さかづきあげよ花なをしみそ

隴上行

雲黃知塞近 草白見邊秋

雲さへも黄色ににじむひなのそら
とりでのあたりしろき草の葉

閨人贈遠五首

花明綺陌春 柳拂御溝新
爲報遼陽客 流芳不待人

花わらひ柳みごりの今にさへ
かへりまさずば春や逝きなん

遠戍功名薄 幽閨年貌傷
妝成對春樹 不語淚千行

ひとりねのさびしきねやのすがたみに
うつる春みてたゞなみだおつ

啼鶯綠樹深 語燕雕梁晚
不省出門行 沙場知近遠

鶯は木のまにうたひつばくらは
かへりきつれど君は來まさず

形影一朝別 烟波千里分
君看望君處 祇是起行雲
わかれては千さとへだつる君をこひ

ながめもやれば浮雲のとぶ

洞房今夜月 如練復如霜
爲照離人恨 亭々到曉光

月かげの霜と見まがふねやのうち

ひとり目さめてあかつきをまつ

遊春辭

經過柳陌與桃谿 尋逐春光著處迷

かすかすの柳のちまた桃のたに

春をおひては路もわするる

秋思二首

月渡天河光轉濕 鵲驚秋樹葉頻飛

月さよみ露をおびたる森かげに

鳥おごろきて木の葉おちちる

一夜輕風蘋末起 露珠翻盡滿池荷

秋きてはそよふく風にはちす葉の

ゆるぐにつれて露たまどちる

秋夜曲二首

丁々漏水夜何長 漫々輕陰露月光

秋暹暗蟲通夕響 寒衣未寄莫飛霜

澄む月に夜をなきあかす虫のねは

ころもかへよと人に告ぐらん

桂魄初生秋露微 輕羅已薄未更衣

銀箏夜久殷勤弄 心怯空房不忍歸

うすごろもいまだかへぬに秋はきて
ひとり野にふく笛すみわたる

塞下曲

辛勤幾出黃花戍 迢遞初隨細柳營

塞晚每愁殘月苦 邊愁更逐斷蓬驚

ひなながら若葉のはるにすみそめし

こゝのとりでにかれすすき見る

いでてゆくいくさのひまにさびしきは

とりでをまもるありあけの月

雲波詠草(一)

今度の行、八月初、盛夏の日に横濱をたち、十月初、秋の月のまど
かなる日歸着するまで九週間、その間、北太平洋の波を凌ぎ、ロッキ
イの雲にわけ入り、バンフとシカゴの會合、ワシントンやニューヨーク
の歴訪等、天然の風光と人界の匆劇とに出入せし數々の遭逢、思ひ出
だし思ひ廻らせば、くしくも情深く、いみじくも興多きを覺ゆ、こゝ
に歸路の船路に思出を録し、その間に得し詠草を收めて雲波のあとを
とどむ、

雲をわけ波をしのぎてとつ國の

友をたづぬるひがし又西

山をこえ雲にわけ入り野を渡り

人の世いでて世にかへりけり

* * * * *

昭和八年八月二日、昨は次女ときの婚儀をすませ、今日は横濱を船出す、八年を隔てての再遊、わが身の變化と共に世の中のかはれる様を前途に思ひやる、航海の初日はくれて、洲ノ崎燈臺の閃光見えそむ、

ながめやる安房の山々水のうへに

すみ晝をなしてけふはくれゆく

海路第二日、やゝ涼しく、碧波洋々、太平洋會議に列する僚友と共なるを思ひて、

太平洋の大海原を日のもとの

子らのゆくみち波ゆたかなり

空くもり、風雨さへ加はる、千島沖にてやゝはる、

ふきしきる嵐はすぎて北の海

日はうらゝかにすす風のみ

路進むと共にきのふとをどつひとの別ち忘る、日々、追手ながら風、雨の間に又霧、船は笛をならして進む、日毎に會議の豫備討議を行ひ、その間には又快談遊戯、日のたつも忘るゝ中に、いつしか陸地を見るに至り、十三日朝バンクバに上陸、午後、汽車バンクフに向ふ、カナダロッキイの峯山、送迎にいとまなし、
ロッキイに土の大波あとどめて

白波のこる峯のゆきかな

十四日午後、バンクフ着、直に會議の開會式に列す、列席者二百餘人、此より十日の間、會議、討論、閑談等に、世界の情勢について多く學び得たるを覺ゆ、新渡戸委員長の苦心、書記たちの精勵、又カナダの

人々の厚意、何れも感謝に餘る、

バンフ附近、山岳の雄大、山湖の幽邃、優遊の旅ならば興會更に深かるべし、この山河に圍まれて岩角に雄視するホテルの樓臺、花卉と泉水との間、午後の日あたりに、茶會の席上、各國の人々と閑談、特に興多し、

一夜、夜半電話に目をさまされて眠り得ず、窓外を眺むれば、天空光耀を見る、始は月の出かと思ひしも、下弦を過ぎし月には早く、又光の筋左右に動くを見て Aurora Borealis と知る、現れては消え、消えて又形を更えて見ゆ、

やみをつくアウロラのひかり色かへて

ゆるぐは何の變化へんげなるらん

琉璃光るりくわうのほとけのひかり人の世に

不思議しめすかアウロラの影

アウロラのなに戯るるらんうすくこく

ひだり又右ゆきつかへりつ

Dr. Morse の孫女、畫家 Whyte 氏に嫁してバンフに住す、日毎に往來し、一夜共にインデアンの部落に行き、テイビー天幕の中に爐を圍むで語る、蠻人とはいへ、彼等にはその生活あり、その心境あり、その物語る所、あはれに情深し、

會議の主題もすみ、二十四日、バンフを去る、ホワイト夫婦見送りに菓實を齎らす、二日の車中に味ひて行く、バンフの山上には雪新にふり、カナダの平野は雨、冷氣秋の來しを覺ゆ、

はて見えぬカナダ大野の秋雨に

さびしくぬるる牛のむれむれ

秋なればこゝにもさくか藤袴

友の七草こひしかるらん

ふち袴こゝにさく見てしのぶかな

はこねの山の秋ぐさのはら

廿六日夕、シカゴに着く、中山一行と同じ宿にて、湖水のながめよく、思ひしよりも涼し、岸本夫婦、ケンブリヂより馳せ加はる、廿七日夕は宗教大會の開會式、それより毎日會合、中山は卅日に、余は卅一日に講演、時恰も日本時間の九月一日正午に近く、震災十週年に當るを以て、主題の外に震災を追懷し、その救助に對する感謝と共に移民法に言及す、主題終りて、座長の發議にて、震災記念に對する同情を表して會衆一同起立默禱、その他別に讓る、シカゴに七日間、圖書館大學等を訪ひ、又往訪來訪の數々、博覽會の見物、月夜湖畔の散策等、先年冬期に一週間滞在せしと共に思出に加はる、

九月二日夜、シカゴを去る、翌朝ビツバトグの邊は雨、夕方ワシン

トン着、四日は休日、見物車にてバアノン丘に行く、

いさは立て心しづけく君すみし

あとをどゞむるこの山と森

ポトマクの澤邊に鷺鶴の類多し、

とつくにのこゝにもあるかたづと鷺

澤のしげみに見えつかくれつ

夕は武富氏一家と共に夕食、歸路車にて送らる、月きよく虫のねしげし、

秋きぬと虫の音しげく月きよく

風もすゞしきポトマクの澤

五日、諸方訪問、議會圖書館々長 Dr. Putnam 等と中食、同東洋部長 Dr. Hummel と學術聯絡の事を談合、Smithsonian Institution 本部を訪ひ、Freer Art Gallery に夕刻までとゞまる、一日の所用を終り、

夕は大使館、又ポトマク河畔の月を見る、

六日朝、阪西女史と會談、ニューヨークに向ふ、翌七日、Arthur Woodsを訪づれて、Rockefeller Centreの事業を見、又ロックフェラ長子を訪ふ、次でDr. Gulick等と會談、翌八日朝、日本協會のLedoux氏來訪、圖書館等歴訪、日本研究の促進は時機の方に到れるを思はしむるも、移民法問題は前途なほ遠きを覺ゆ、

八日午後、ニューヘブンに向ふ、エール大學にて朝河君は未だ歸來せざるも、社會問題を研究せる石川道司氏にあひ、翌朝に互りて談を聽き、米國の社會状態について學び得たるを覺ゆ、

九日朝、エールの新圖書館を觀る、八年前には設計中なりしもの、千數百萬圓を費して新に成り、設備の完全は云はずもがな、裝飾萬般當に豪華といふべく、館長Keogh氏種々苦心の跡を物語る、

午後、ニューヘブンを立ち、夕方岸本夫妻に迎へられてその新居に入

る、あはれ思出ゆかしきケンブリヂ、今こゝに來て子等の家に宿す、異境亦異境にあらず、三旬の旅程を経て正しく家郷に歸るの思をなす、夏休み終らぬ今、歸來の人は僅なるも、ペリーや富田氏の家に夕食し、ウーヅの新居に茶を共にし、又若干の新知に接するを得たり、中にも二十年前ハアバアの講筵に連なりしFoster Damon今はブラウン大學の教授となれるが、遠路訪ひ來りしは情殊に深かりき、東洋學研究の新進青年數人を知り得し事も楽しく、美術館に東洋藝術の逸品を加へし事も興深し、ワイドナ図書館の外に法學部の圖書館を訪ひ、チャールス河の南北に加はりし大學の新館、フォグ美術館の新築など、面目の新なるものあると共に、舊知の諸館、思出ゆかしきも多し、

ケンブリヂ五日の滞在も、あすは出で立つべき夕、岸本二人と靜に夕食を共にし、寢に就きて思は長し、

思出のゆかしき里のこゝにまた

子らが家居にいく日送りぬ

きゝなれし昔のかねの夜半の音を

時のへだても忘れてぞきく

十五日、雨の中に二人に送られてポストンを去る、

この里に子らのこしゆく別路に

こゝろありてや秋雨のふる

秋雨のそぼふるこの日この里に

わかれて又もたつたびぢかな

北に進み、ニユハンブシャに入るに従つて、雨ははれ、山々の秋色

うるはし、

旅のみち夏と秋とのゆきかひに

日毎にかはるそらの色かな

北の國はやくも秋の音づれて

眞青のそらにはゆるもみぢ葉

雪の山くだりて南なつにあひ

こゝのたか野にまた秋を見る

夕ぐれモントリオル着、翌十六日 MacGill 大學を訪ひ、午餐には William Birks 氏と共に國際關係委員會の人々と會す、午後見物車にて市中を巡見す、山河の美と共に、カトリクの施設多きこと著し、

夕、汽車西に向ふ、翌十七日は終日ふりみふらずみの秋空に、オンタリオの森林地方を馳す、

野も山もうすすみこすみえがきなす

そらを畫絹にあきさめの筆

野を蔽ひひろき大ぞらゆく雲の

うすく又こく墨畫かく秋

インカベやイロコワの民のなごりかも
 もりの木の間にテイビイの見ゆ
 龍田姫こゝには岩に色そめて

野にも山にもにしきをぞしく
 ひとしきり又もふりくる村雨の

野をも山をもつゝみはてけり

夕方、途は Lake Superior の湖岸に出で、Heron Bay に夕日てる、

雨はれし鷺の入江に入日さし

上つみづうみうるはしくてる

海山のながめはあれどさびしくも

鳥さへ見えず波うちよする

十八日、眠さむればマニトバの平原、昔は湖底の平野、終日つらなる、

うなばらに似たる大野を一筋に

はせゆく道のそらにつらなる

天たるゝ雲のむらむら色々に

つきぬ廣野のきはをあやどる

マニトバのひろ野とぶ鳥うなばらと

見まがひもせでゆくへ知るかも

大空にあやを畫きかはり行く

むら雲見ては時わすれけり

大野はらりをりおこる秋風に

すなの烟のまかれてぞゆく

秋の野に日よりうけて首あつめ

なに物語らん馬のむれゐる

十九日、夜あくればカルガリイに近く、遙にロッキイの山々見え、

旅路の終近き思ひす、山に入り思出のバンフも過ぐ、

樺の葉のふもとを染むるロッキイの

峯のしらゆきそらにしるくも

かばの葉の黄色かばいろ谷川の

青みにうつるロッキイの秋

先には野山に紅の色はえし Fire weed の、花はちりて、葉のみ赤し、

野花草のびくまの花はちりてものこる葉の

くれなゐなるを夏のなごりに

重なる山と谷との間に一日はすぎて、尙ほ一夜車中に眠る、

二十日朝、路は平野に出で、フレイザア河の岸を西に馳す、山を出

でし感に心自ら寛なり、入江の岸に雨來る、

山をいでひらの流るゝ大川の

流を見てはこゝろゆたけし

ふるさどに近しやこゝの島山は

雨にかすみて大和畫をかく

新婚の次女が夫と共に海を越え來て待ち居しに迎へられて、バンク

パに着き、同じ宿に入る、二人と共にせし異郷の一日半は、二人の一

生にも忘れられぬ思出となるべし、

廿一日、加地夫婦、シカゴに向つて去る、

山をこえ海をわたりてこゝにあひ

東と西にまたわかれ行く

人の世のあへばわかるゝ常ながら

へだたればこそ思ひ長けれ

廿三日、西に向つて船出、入江をすぎてビクトリヤに着、新渡戸夫

人と埠頭に會ひ、病に臥せる新渡戸君を訪ふ、病中ながら談こまやか

なり、Oak Bay Beach の宿に夫人と茶を共にして後、船に歸る、

夜、船出、新月見ゆ、廿四日、海靜に日照る、廿五、廿六日、西風強く、晴陰常なく時雨あり、

たつ波につらなる雲のちりぢりに

とびかふひまにしるき星影

北の海なみ風ある、眞夜中に

やみをつき行く船のををしき

波のおとしきるをきゝてわが船の

風とたたかふ力をぞ思ふ

大海のまなかをたどる船路には

時のかねこそ夜半の友なれ

廿七日、アラスカの沖、風なほ強し、

をちこちにしぐれをふくむ黒雲の

きはをぬふ日の波にうつらふ

アラスカの沖のさむ風ふきしきり

烟霧えんむの中にしらなみのたつ

夕、弓張月、雲間に出没、

弓張の月は船路のしるべして

この月みたばふるさとの月

廿八日、波しづまり、日光あり、終日アリウシヤ諸島を右に見て西

に進む、

アリシヤの島の山々さびしくも

雲と波とのなかにただよふ

夕方、Mount Russel の姿見ゆ、

こゝに又ふじのみやまの姿なる

峯の白雪夕ばえにてる

二十九日は飛びて三十日となる、波しづかに日光もれ来る、

日のもとの近きしるしか海の面も

波はしづかに日影てりそふ

風なぎて波の音かすかに窓のそと

松風もやと耳そばだてつ

十月も一日を迎へ、船は千島沖に進む、二日三日、溫和の天、夜は月光加はる、

今さらにかへる船路におもふかな

はるばるへにしわが旅のほど

日の本のひがしの海のなぎわたり

水のかぐみに月のうつらふ

犬吠岬の閃光燈臺見えそめて、甲板に月をながむる人々の歡聲わく、眠さむれば、十月四日未明、船は既に横濱港外にあり、夜あけて人々來り、共に京に歸る、大學にて總長始め人々に會ひ、又同船のバロ

ダ國主を圖書館に迎ふ、

夜、中秋の月清し、

海山に夏と秋とをへめぐりて

歸ればあきのふるさとの月

*

*

*

*

*

歸朝後、勿劇の間に十日をすぎて、十四日身延山に詣づ、峯のもみち葉、未だ紅染めざるも、秋氣峯山の色にしるし、

ことし又こゝに秋來てそのかみを

しのぶ身延にそらさえわたる

十五日、富岳の麓をたどり、十六日朝、精進湖にて、暴雨はれまの富士を見る、

雨やみてさまよふ雲にひかりさし

ふじのみ山をぬひつそめつつ

富士がねをめぐりて雲のとびちがふ

ひまに日かげのさやけくぞてる

ふじがねにあたりつちりてゆきちがふ

千變萬化せんべんばんくわくものををしき

秋雨の中に本栖湖のしづめる姿を見、裾野の西側を馳せて駿州に下る、

さびしくも風にふかれてかれすゝき

富士のすそ野の雨にしをるる

岩本實相寺に詣づ、

こゝにてぞ國をうれふる眞心を

のりの光にてらし見ましき

十七日朝、伊豆山にて新渡戸君の訃報に接す、嗚呼、

やめる身のあつき握手あつくしゆの今つひに

ながき別れとなれるかなしさ

ひろき世をひろくゆたけく歩みにし

君のあしあとしたはるゝかな

ひむがしの海ながめては君ゆきし

水のかなたにこゝろはせゆく

雲波詠草(二)

100

昭和九年四月、四十年に餘る大學生活を離れて自由の身となる、平生烟霞の癖に乘じ瀬戸内と九州に遊んで歸る、此より先、國際文化振興會の事業に参加し、又國際學藝協力委員會委員に選舉せらる、外國には學問同僚の外に親交の友に乏しからず、國際の事業に當ること必しも唐突にあらず、且つ又大洋の雲波、スイスの湖山、イタリヤの碧空、平素夢遊の境に富む、加之子女二人亦海外に家庭を營む、事業と共に巡遊、巡遊と共に新境地の家庭にくらすこと、一生秋期の幸たるを失はず、即ち海を渡り、進んで國際事業に従ふの覺悟を定め、一生第十回に當る横濱出發の日を迎ふ、

*

*

*

*

*

六月七日、初夏の炎天に横濱船出、去年と同じ日枝丸、人々の見送り、彩紙の交換牽引賑ふ、

くがと海わかれを惜むこころねを

つながんいこの色のとりどり

色々の絲の千すぢもわかれゆく

へだてにきれて船はなれゆく

日は安房沖にくれて、海黒し、

わがひじりをさなきころはこのあたり

波をしのぎて櫓をやをしけん

八日、西の快風、

ひと日へてけふは波のうへ人の世の

せはしきさかの夢ときえぬる

101

しほの花あたりにちりて海原の

ながめつきせぬわが旅路かな

船のたびいつもながらのどげさに

なみに入る日をながめつつゆく

九日、朝霧、

きりこめてしづけき海の船すまひ

いでゆの山家おもはるるかな

十日以後、寒さ加はり、いつも晴れ、

日のいづる東の海のとゞ中に

建長五年のむかしおもほゆ

身はいづこ海のまなかとしりながら

ふみよむ夜半のつねのしづけさ

この海もよろづの國もやすかれと

ひじりの御子のみふでをろがむ

夜なよなの船ちのどくに思ふかな

ふるさと人のおきゐいかにと

夜なよなにおもひうかぶる故里は

ちさとの水のあなたなりけり

朝夕ののりのつとめの法の聲

この大海の水にたむけん

たちのぼる香のけむりをながめては

そらにつらなるかほりとぞおもふ

人々より数々の電報、其等に答へし中に、

西のうみわれ使してひがしより

てらすひかりを人に見せばや

ふく風ものりの聲してひむがしの

海ゆくみちのたひらけくこそ

君は西われは東のたびのそら

同じひかりをあふぎてぞゆく

第二の十二日、西風や、強し、

うなばらを日ごとふきくる西風は

ふるさと人のこゝろやりかも

十五日雨、夜ゆめさめて、

父ゆきしをさな心のかなしさの

六十ちのたびの夢に入りくる

なきからの父のみそばにたらちねの

母のみすがたゆめに見えつる

わが子らもわがなきあとになき父を

夢路にしたふこゝろ知るらん

夢さめて浪の音きけば清見がた

夜半のいそべをおもひこそやれ

十六日、雲され、風加はる、

雨ばれのをぞら見えて海原の

いろます中にしらなみのたつ

十七日、島山見ゆ、ピクトリヤ沖にて切に新渡戸君を憶ふ、

こゝにきて思ひぞいづる病みふしし

君にわかれのこぞの秋の日

思出の君がすみかを水の上に

ながめてしのぶありし昔を

思出の種とならぬはなかりけり

君とたびせしこの山と水

十八日、バンクバ上陸、石井領事の午餐にて諸人と會合、古在前總長の訃をきく、

今ははたとはの別れとなりにけり

旅出のわかれ君につげしは

途を Canadian National にとりて汽車東に向ふ、ロッキイ山中に入りて谷川に沿ひ、淵に臨む、手にせる王摩詰の詩、「山壓天中半天上、洞穿江底出江南」、恰も眼前の風光なり、

白雲につらなる峯のふもとには

岩をうがちて淵のうづまく

山中の趣刻々にかはる、

くるごとにおもむきかゆるロッキイの

山と水とはたびのよき友

日くれんとして、弓張月、山のはにかゝる、
家をいではじめて月の弓張を

こゝロッキイの山のはに見る

こん月はレマンのうみに相見んと

雲まにみえし弓はりの月

十九日、雪の峰近し、Jaspar を過ぐ、野邊には Indian paint brush の花さきて紅の叢をなす、紅筆草と命名、

若みごりはゆる野山のそここゝに

紅ふでぐさの畫をえがきなす

雪はなほつらなる峯にのこりつつ

とけてはかゝる水のしら糸

フレザアのみなかみ遠くこゝに來て

きのふの海をゆめかどぞおもふ

土のなみなみうつ中に岩の城

いはの伽藍のそらにつらなる

ゆくてには海にもにたる野をおほひ

ゆふだち雲のむらむらとたつ

うしろには峯の白雪ゆくてには

うづの黒くも雨ふらす見ゆ

高野はらながるゝ水のゆるやかに

砂ひたすへに樺しげりあふ

浮雲のちりつあひつつゆくすがた

人もかくこそ世にゆききすれ

けさすぎし^{たけみねやま}岳峯山も白雲の

あなたにわかれつげつゝぞゆく

夕日さす廣野のみどり色はえて

つくるきはには雲のかかやく

西ならで北にいる日のひかりさし

ゆふべのそらのさやくもすむ

雲のみね波なす雲のさまさまに

夕日をうけてこき色畫かく

あざやかに色とりごりの雲のさま

ことばおよばずたゞながめやる

西の空のこんの茜にてりわたる

ひがしにすさぶ夕立のくも

二十日晴、マニトバの野、去年過ぎし地ながら、廣漠の感、今更に

覺ゆ、

あをぞらにとぶるのこ雲かさなりつ
たかくのぼりて峯をつらぬる
波のごとおきふす岡のめもはるに
つゞきて人のけはひだになき
すぎてきし方とおもへばなつかしき
はるかにかぶ雲のひとひら
マニトバの海にもにたる大廣野
しづむ日かげにわかれてぞゆく
北の國しづむ日影のおそければ
くれもはてぬに風につめたき
あたりには木立のくらきみづ海に
弓張月のうつるさびしさ

二十一日くもり、オンタリオの山湖地方、實に是れナイス岩塊の一
大陸、終日馳せても盡きず、

ますますなる森の木立のそこゝに
わかばの樺のすがたやさしも
はせはせて千里かさねてなほつゞく
一ついはねのオンタリオの森
幾切いくがふのむかし氷河へうがの死のあとに
いまも寂じやく静じやうのもりとみづうみ
寂寞じやくまくをやぶるもろごり聲きよく
もりにうたひて水のへにとぶ

午後はれて日光清し、
雲はれて日かげのさせば水うみの
さびしき面にさゞなみのてる

なぎさべに水にしためる白かばの
色もしるけく水にうつらふ

香氣たかき Mountain tea の花白し、「小米つち」と命名、

木かげには小米つちの花しろく

のこんの雪をおもはするかな

入日さす豊旗雲のいくすぢか

色とりざりにならびつなびく

夕日てる樺のわかばのこがね色

かやく雲とひかりてりそふ

二十二日朝快晴、モントリオルにて車をかゆ、ブルマン車の名

Ramona かつて乗りし覚えあり、

同じ名の車にこゝにめぐりあひ

けふの旅路の身をのせてゆく

いづこともいつともしらぬえにしにや

めぐればめぐる車にぞあふ

モントリオルの町をながめて、

大君の御山とむかし名をおひし

みやこに今は大船のつく

バアモント地方、去年と途を異にして、湖水一層多く、四邊若緑の

世界、

この國の春はみじかく初夏の

草木たちまち若みどりする

野も山も雨にあらはれわかみどり

もえんばかりに日かげてりそふ

みどりあを野山の姿のごやかに

水うみとほくさなみのてる

午後暑さ加はるも、行手にケンブリッジを思ひて心いさむ、

いく千さとふるさと遠くはなれても

子らにあふ日のけふのいそしみ

思出のふかきまなびのふるさに

友もゐるなり子らもまつらん

あかつきを今ぞむかふる妻子らの

ねざめのゆめに我をみるらん

名にしおふバタの盃みだれさく

まきばに牛の草はみてゐる

初夏のこゝにはさくや女郎花

ふるさとの秋にまたも相見ん

夕迎へられてケンブリッジにつく、むしあつく、夜半雷雨、翌二十

三日朝ペリーを訪ふ、去秋あひし夫人、今は亡き人、

こぞの秋まみえし人は世をさりて

のこるやかからの我をむかふる

學術聯合會の東洋部委員會、

をちこちの學びの友のあつまれば

道おのづからひらけゆくなり

二十四日、日曜、一日安らかにウーツの新宅にて茶、夕チャールス

河畔、

日曜のしづけき朝のすす風に

木の葉そよぎてもろ鳥のなく

夏はきてゆききの人のきよらなる

チャアルス河の月のゆふぐれ

この川にながめし月のいくそたび

けふはわが子をともなひて見る

二十五日、諸友にあひ、會合を開き、夜行、二十六日早朝ニュー
ク着、ビエルの三十八階に宿をとる、

目もはるに窓のちよろづ限なき

あかりながむるわが宿りかな

このみやこ家のおほなみうつ中に

あえぎおぼるる人のおほかる

それより三日間、Rockefeller Foundation その他諸會合、

そのかみのバベルをしのぐ高ごのに

いねても人は地をはなれえず

わが宿のそらにつらなる高ごのは

夏をもしらぬすゝ風のふく

雲をつくこの高ごのの窓の邊に

とびくる蝶のなにをたづぬる

一夕はコニー島の熱鬧を見る、

人界じんがいに百鬼夜行のこのいそに

月のみそらにしづけくぞすむ

三十日午時、岸本夫婦と共に Franconia にて ニューヨーク 出帆、太西

洋に浮びいづ、

この國の友にわかれて海のはて

かなたの友をたづねてぞゆく

そらをつく高殿の影かききえて

海原とほくそらにつらなる

七月に入る、一日くもり霧あり、二日やゝはれ、夜半月をみる、

山にみし弓張月のかたをかへ

夜半の海ちにさびしくもてる

三日、西經四十五度をすぐ、日本と十二時間の差、

ふるさとは地球のかなた夕は朝

かぞふる時のかずのおなじき

今こゝにしづみゆく日を見ておもふ

うなばらてらすふるさとのあさ

船路の夜半に多く往時を夢みる、全く忘れさりし過去のよみがへり
來る感あり、

母の友むかしの人を夢にみて

親子ふたよのものがたりする

五日、六日、うららかなの海に船中にぎはふ、

白雲とあをぞらのわかち海のものに

うつしいだしてうねり畫をかく

さやけくもしづけきけふの海原の

そらに富士がねあらまほしこそ

青海とそらのさかひのあざやかに

見ゆるそのさきくがや見えなん

フランスのそらに船路のちかづく

おもへば思出くもとわきくる

おほけなくうきごの船にのりいでて

やすくゆたけく日をおくるかな

浮殿になみもよせねば人みなの

海をわすれてゆふげにぎはふ

浮殿のゆふげにをみなおのがじし

きかざるけふの海のごけさ

浮殿の酒のつかさがたゝかひを

むかしの夢とものがたるきく

七日晴、時々濛氣、アイルランド沖に近く、ルイジタニヤの悲劇を

思ふ、

法のこゑこの大海にたむけてぞ

むかしの修羅のあととふらはん

八日、朝來陸地見ゆ、

イソルデのむかしのあはれ思はする

コオンヲリスを波のうへに見る

アルビヨの白き島根によく來つと

しろきかもめの迎ひむれくる

船はプリマウスに寄港して後、海峡 La Manche を東に進む、

袖のうみ今はやすらにこすものを

むかしはいかに人なやみけん

ナポレオン蓋世の雄もこの海を

こしえぬうらみ夢にのこしつ

あすは子等と別れて獨りフランスに上陸すべき日、

いづくにも別れはつひにくるものを

今日のなごりのことさらをしき

ま夜中にめさめておもふふるさは

今やあけぼの鳥うたふらん

九日、早曉、船は海峡のブロニに入りて上陸、子等は船にのこる、

親と子のおなじ船路の今さらに

わかれゆくべき今日はきにけり

わが子らを船にのこしてわかれゆく

たびの中にもまたたびにたつ

パリに着けば、立、佐藤兩君に迎へられ、宿につきて共に中食、夕
は Garnier の家を訪ひ、時をへて歸る、歸路風すゞし、

年をへて相見る友と夕げして

今とむかしのかたりつきせず

みどり葉のパリのブルバル風そよぎ

夏もすゞしきフランス語をきく

十日、Institut international de Coopération intellectuelle を訪ふ、佐藤君の中食會、數人にあふ、午後 Cité universitaire を見る、その日本家屋の建築に頗る不満足、夕セイヌ河畔の涼風に散歩、ノートルダムを夕のそらに仰ぎ見る、

くる毎にセイヌ河邊に森嚴の

すがたそのものあふぎ見るかな

夜のそら地よりぬけいでみそらさす

塔のシメエル何ながむらん

十一日、大使館を訪ふ、三谷代理大使の午餐、後共にモンマルトル

に上りてパリを眺め、ゾラを語る、暑氣加はる、午後、立、佐藤兩君と共にボア、其より河畔プロニのクラブにて杉山君の晚餐會、人々にあふ、カーン氏特に時事を痛論す、庭に出でて、會棲の懷舊切なり、いくとせの思出とほくクラパウの

鈴にもにたる夏のねをきく

十二日、André Honorat 氏に面會、Institut d'Etudes japonaises について談合、晝三谷氏午餐にて杉山君の送別、人々にあふ、夕はガルニエの家にて數人夕食、久しくあはざりし "petite Eveline" も來る、をさな兒が今はいらつめその母と

見まがふまでにおひたちにつけり

年へてもむかしわすれずをさな兒の

こゝろに我をむかふるこの子

十三日、夜來の雨にてやゝ涼し、出發の爲に荷造りす、

世のさがはかくもあるらん旅の荷を

ときつをさめつ又たびに立つ

時間の餘裕にリュクサンブールに繪畫を見てゆるゆるし、佐藤君と打合せの發車時間を思ひちがへ、終に乗りおくれ、夜行する事とす、雷雨至る、半日萬葉集をよむ、

いにしへの萬づ言の葉くりかへし

奈良にはあらでバリにしてよむ

旅枕つまこふ人のこゝろねは

むかしも今もかはらざりけり

十時すぎ、驛に入る、旅客充滿、漸く車にのりて發車、

十四日、Belgarde にて朝のカフェ、列車はおくれて九時ジネーブ着、佐藤君に迎へられ、國際聯盟事務局を訪ひ、Murray 議長其他に會ふ、午と夕と、上井、吉阪兩氏の宅にて食事、種々ジネーブの事を

きく、

十五日、日曜、吉阪氏一家と湖南の山邊に遊ぶ、Mornex にはワグネルとラスキンの舊居あり、

そらをつく峯のみたまのやどりてや

世の人さます聲となりけん

Chateau Sareb は新戸渡君遺愛の地、湖山のながめひろし、

海山をながめて君が世のちりを

のがれしあとのしのばるるかな

其より長驅、エビヤンの鑛泉に行き、途上湖山の眺を恣にす、野邊に草花多し、

女郎花やさしくにはふこの野邊は

アルプの山風こゝろしてふけ

峯たかきアルプの雪のかよひきて

野にさきにけん雪の笠ばな

十六日、會議初まる、議長マレー開會の辭、ポアンカレ、キュリー夫人と共に、新渡戸君に對して追悼、後余の紹介に答ふると共に其事を謝し、又東西文化の接觸について一言す、此一言、後話題に上り、又ラヂオ放送の辭となる、

議題、方法論多し、午餐は Mon Repos の庭をながめて、Shotwell, Malcolm Davis と共にす、午後の議事は、諸國國內委員會の報告、甚しき長談義もあり、

十七日、午前は政治經濟共同調査の問題、午後はラヂオ放送の件、話題只管迅速を貴ぶ事に走る、依て單に迅速を貴ぶの弊について一言す、多少冷水を注ぎし効果ありしか、會議終りて湖畔を散歩、夕ばえの空にモンブラン始めて見ゆ、

モンブラン夕日のこがねうすらぎて

ジュラの山邊にとがまなす月

夕は横山總領事宅、湖山のながめ弘し、

十八日、早起、晨朝湖上の眺め、

茜さすレマンのうみの水の邊に

あかつき告ぐるもろごりの聲

午前、國內委員會關係の小委員會について、本會議はシネマの問題、續いて Maurette の支那教育改造に關する報告、明晰適切、午後雜題、退席してラヂオ放送の原稿を作る、夕は Students' International Union 會合、

十九日、朝、小委員會つゞき、次で本會議、教育特に教科書問題、日本の教科書について報告す、後支那側より議論ありしも、議題とせず、午餐は事務次長 Pilofti 氏の招宴、午後は博物館問題、此に關し

ては我國が如何にも人後に落ちたるを思ふ、

二十日早朝、湖岸の臺上にてラヂオ放送の吹込を行ふ、技師オランダ人 G. F. Diesel 氏大に同感の意を表し、共に現代文化の病について語り、其人の書帖に書き與ふ、

水をこえそらにひろがりゆく聲の

人のこゝろにやざれとぞ思ふ

Let my voice now spreading over the waters and
through the vast expanse of air finally find an
abode in the human heart!

會議議題、著作権の問題、範圍を擴大して droit intellectuel の問題となり、法律、労働、發明、醫療等にひろがり行く、

午餐には、マレイ議長その他の人々を Mon Repos に招く、午後は豫算等雜題、夕は中華國際圖書館に招かる、

二十一日、會議最終の日、諸の報告と決議終了し、皆互に來年の再會を期して散會、

午餐、横山總領事、書記部の人々を招き、湖邊に快談、午後記録をまとめ、諸方に通信、夕は鮎澤氏宅にてマウレット等も來り、夜おそくまで談話、

二十二日朝快晴、用事終了の氣爽快、上井氏の車にて諸方見物、午すぎ出發、雷雨至る、

事はてて別れつげゆく山と水

またこん夏のちぎりわするな

人の世の事わざしげくすぎし日の

思出ふかくまた旅にたつ

野と森をはする車にうたゝねの

夢にぞうかぶ山と水うみ

夜ふけてパリに着く、英夫先に來着、パリの一夜を共にす、

二十三日、朝パリを發す、佐藤君見送に來て陶淵明集を贈らる、車中散讀、北フランスの平野をながめつつ、「停雲」の一首を譯す、

たなびきつたたずむ雲のそらあひに

こゝろゆく雨しめやかにふる

はるけくも友を思ひて雨ぞらに

盃あげてひとりほほゑむ

海のプロニユよりフォクストンに渡る、海上時雨、ロンドンに着きて子等四人に迎へられ、シチを経てサレイの家に入る、

こゝにきて子らの迎にはゝえみつ

むかしゆかしきシチを見るかな

わが子らの家に夕げのはつつごひ

サレイの岡に夕日てりそふ

二十四日、朝はれ、午後雷雨、Lord Wakefieldを訪ひ、圖書寄贈の謝意を表す、卿は頻に日本を賞讃す、

二十五日、朝はシチ、午後安靜に己が誕生日を送る、子等四人と共に Shirley Park に夕食、食後ひろびろしたる庭園に月をながむ、

子らとともにこの日むかへてこの園に

ながむる月のまごかにぞてる

思ひきや六十とせあまる思出の

けふをかくこそおくらめやとは

二十六日、松平大使の午餐にて、リンドレー前大使その他の人々にあふ、午後バキングム宮庭の園遊會、萬事質素に行はる、三十年前、その宮中にて先帝に拜謁せし事など思出ふかし、岸本夫婦午後に出發し、加地夫婦見送に出で、夕暮ひとり家を守る、

旅にしてたびにはあらぬわが家に

入日ながむる夕ぐれのそら

花園のさきにかしは木森しげみ

ながめしづけきこの家居かな

夕ざればそらの茜のきえぬまに

森の木の間につきさしのぼる

わが子らは水のうへにてながむらん

ふるさとのかたいづるこの月

はらからのあひては又もわかれゆく

こゝろのあはれ思ひこそやれ

波もたち風もふくらん船路には

親のふるさとおもひつつゆけ

二十七日、朝 Universities Bureau に Brander 氏を訪ひ、午後は

Sir James Baillie に會見、大學交換の件につきて打合をなす、間に
British Museum に入り、特にエヂプト部を見て、亡友ホールを思ふ、

石ぶみに心ひそめしわが友の

ものがたるこゑきかまほしくぞ

年をへし石のすがたはならべども

友のすがたは見んよしもなし

このたちに又は野山にかたらひし

友のかたみの石のかずかず

とこしへのこれと姿きざみおきし

人はこゑなくこゝになみゐる

二十八日、終日閑靜に、旅の記録を整ふ、

月かげはふたゝびみちて今こゝに

たびちのあとを書きぞあつむる

これよりもいくたびすぎんわが旅の

ひろくけはしき海山のほど

海山の途もものは六十とせの

おもへばながき人の世のたび

二十九日、日曜、岡正雄君來訪、三十日、三十一日、諸方訪問、又民族學會の會合に出で、シミット、モウス等舊知新知の諸學者にあふ、八月一日、British Academy の Sir F. G. Kenyon 日本協會の Sale 氏等訪問、又アカデミーの畫を見る、夕は加地夫婦結婚一年の記念に、三人静に家に夕食、

こぞの今日ちぎりし子らの思出を

この家居にかたるうれしさ

二日風雨、夕大陸の旅に上り、ハリヂより船出、波の音を耳にしつつ寝に入る、三日眼さむれば、船は既にフークに入港、上陸して汽車、

オランダの野を東に馳す、

野をひたす水に柳のかげうつし

草のしとねに黒牛のねる

この國を夢にしたひしそのかみの

オランダ學者つれてきまほし

途は山林に入り、國境をすぎてドイツに入れば、處々ナチスの旗を見る、山野は夏の平和を示せど、民の心はいかに、

たがわざぞ境をわけて國をたつ

つちには何のしるしもなきに

二十年前開戦の此月此日頃を思ふ、

國たみをやきも盡さんたゝかひの

ほのほ立ちにしむかしのこの日

ふたそとせ早くもすぎて今もなほ

ほのほのさめぬ民のありとは

午後ベルリンに着く、出納書記官に迎へられ、チアガルテンを過ぎ、エデンホテルに入る、屋上の園に茶を共にして今昔を語る、三年前カイゼル治下再び此地を踏まじと思ひて去りしベルリンに、ヒトラーが獨裁政治を固めつつある間、特に大統領死後の今日、再びここに來りて雨中に市中を見る、興亡の變、不思量の思深し、

四日、夜來の雨はる、リンデンの邊を見る、景物は三十年前と大差なきも、代は既に變れり、日本研究所を訪ひ、所員 Rumpf 君等と語る、午後長井歴山君の好意にて、その車に乗じ、郊外山水の間に中食し、ポツダムの森を経て歸る、夕、永井大使に招かる、ドイツの現状について談話をきく、

五日、雨中ベルリンを去る、西に進むにつれて空はれ、オランダの

平野に入りて、落日の景美はし、

雨そぼるドイツの野邊をすぎきては

オランダの野に夕日てりそふ

みどり草夕日にはゆる野面ひろく

たゞゆる野川つぎつぎに見ゆ

木も草も水にひたれる岸のへに

あひると共に兒らのたはむる

沈みゆく入日のひかりくれなるに

野川をそめて草とてりあふ

薄暮ハーグに着き、舊知のベルビューに宿す、

六日、公使館を訪ひ、又古文書館を見る、武富公使と共にスケブニ
ンゲンに中食、涼風の中にも浴客多し、歸路平和宮を見、又モリツホ
イスに晝を見る、

河の邊に並木のえだを軒にして

ゆかしくならぶオランダの家

オランダの名さへ昔をしのばせて

野邊も家居も水も畫をなす

夕は公使の家に招かれ、舊知の家族に迎へられ、美はしきその新居にて晚餐、夜ふけて宿に歸る、

ウキレムの園の木立をにはにして

きよくゆかしきこの家居かな

七日、ライデンに行く、淺井、磯部諸氏に迎へられ、その大學に人種學博物館と新圖書館を見、又ペテロの寺を見る、閑靜の大學町に懐古の料多し、

八日、ハーグを去つてブリュクセルに着く、直に大使館を訪ひ、*Général Seligman* の地球儀下圖製作を見、又 *Général Pontius* を訪ひ

て後、市中を散策す、十五年前戦後の時と趣を異にするものあるも、景物は多く異ならず、

九日、朝霧の中に車を馳せてルバンに向ふ、村々の邊に墓地諸處にあり、美はしく花を供へたり、ドイツ軍の兇手に斃れし村民を葬れるなり、

そここの野邊の墓原あへなくも

たふれし人のかたみのこして

市に入りて先づ大學總長を訪ひ、圖書館を見る、全滅の慘を経て復興の今日を見、同情の深きものあり、館長に伴はれて隈なく館内を見る、

やけ野原あはれとどめし文ぐらの

今のすがたのいやもたふとき

二十年前、ドイツ軍の此市に侵入し來りしは實に今月十九日、組織

的焼打は六日すぎでの二十五日、當時地下酒倉のありし故を以て焼打に漏れしプサン氏の家を音づれて、その近傍一帯焼野原なりし當時を追懷す、驛前の記念碑あはれの跡を傳ふ、

ひたおしにかちごきあげてよせて來し

ドイツのほこり今ゆめのあと

思ひやる夜叉のやいばにあきたらで

修羅のほのほのあれしそのかみ

歸路、Tervelenの園に遊び、ラアケンの森をすぐ、ラアケンの御寺には先皇を葬る、戸はどちて入るを得ざるも、戸外より拜す、

民ととも四とせのうきめなめつくし

國をまもりし大君のあと

ををしくもベルジだましひ貫きし

君のみはかべなみだしてたつ

夕は大使館にて晚餐、館員諸氏と語る、

十日、セリクマン少將を訪ひ、Groendal Woluwe等の森に綠樹碧水の間を馳せめぐる、午後セリクマン少將と共に、陸軍學校に地球儀を見、又軍事標本類を示さる、

十一日、ブリュクセルを立ちて、オスタンドより乗船、海岸に沿ふて航す、空くもり風強し、

くがに水そらにも修羅のくるひにし

むかしを夢とこのあたり見る

黒雲のひくくもたるゝあらいそに

波うちよする色もにごりて

夕、サレイの家に歸りつき、夜は三人静かにかたらふ、

歸來兩三日、陰晴常なく、冷氣を覚え、爐を焚きては、日本の夏を思ひやる、天はれて日光照らせば、稍夏を覺ゆるも、朝夕は秋氣爽に、

向ふの丘上に見ゆる水晶宮の隠見明滅の變化面白し、

朝夕に白くまたへに色かへて

ひかりにはゆる水晶の宮

十餘日の間、人々に招かれ、又招きなどし、舊知に新知を加へては、
一層の親しみを此國に加ふ、

この國のふるき友垣あたらしき

しるべになごりをしまるるかな

一日はテート畫廊に遊び、特にワッツが作の前に時を經たり、

かくまでに人のたましひゆるがする

筆のちからのくしくををしき

一日は松平大使がバアナム林中の家に遊ぶ、

バアナムの森のしげみに夕日さし

世はみごりばの色にかかやく

二十三日、明日は乗船すべき日、諸處に用務を辨じて後、夕は靜に
家にゐて、夜ふくるまで月をながむ、

さやけくもてる月影をよもすがら

こゝのなごりとながめぬるかな

二十四日、午後サレイの家を出づ、

おくる子と別れゆく父ことばなく

すゝむくるまのあとかへり見つ

船に乗じ、送りこられし加藤氏夫婦と幸一との去りし後、すぎしロ
ンドンの一月と、我が生の過去など思ひめぐらす、夜半すぎ、船はドッ
クを出でてタイムスの中流に浮ぶ、満月中空にあり、河邊燈光つらな
る、

月まごか波にゆらめく月影に

ふなちの末のてりわたるかな

月にてる流れゆたけきタイムスの

岸邊にひかり星とつらなる

月かげのくまなくてらすそらと水

なかにしるくもあかしひらめく

二十五日、船は海峡に進み、ドバアの斷崖白く著し、

一夜へてあけぼののそら水の上に

見つつゆくては日のもとの國

風なぎ、海靜に海峡を西に進む、

袖の海雲間のひかりアルビヨの

白きしまねをてらす見てすぐ

そでの海すゞ風そよぐ波の上に

ひかりのすなごまばゆくもちる

二十六日、はれながら時々濛氣、ビスカヤの海涼し、二十七日早曉

星斗爛たり、

あかつきの明星なみにうつる上に

ひかり燦爛のオリヨもろ星

終日、うねりあり、霧時々こむ、

大海の船をゆりごとゆるがせば

われは赤子のこゝろしてねる

二十八日、ポルトガルの沖合を南に進む、夕日てる時、サンピセン

テの崎を過ぎて船路東に轉ず、

キリシタンゆききのむかししのびつつ

われもみたびはピセンテの崎

マルチリヨとぐべく國をたちいでし

いくそのパデレこのふなちへし

西國さいこくのわかき公達きむだちこの海に

くが見し時をおもひこそやれ

地中海に近づきて空すみわたる、

そらきよみ天の河原にすなごなす

星のひかりのてりはゆるかな

月影をとかしてゆるぐ波の上に

をちこち見ゆる船のとぼしび

二十九日、朝ジブラルタル入港、上陸して市中見物、風物南國の趣あり、奇巖峙立して港を擁し、此岸對岸兩大陸相接する處々に古砦の跡見ゆ、

山の上みゆるとりでの數々の

かたるは修羅のたゝかひのあと

暑氣やゝ加はり、地中海の水藍碧うるはし、處々イスパニヤの山を

見、先年曾遊のアルメイラ港を思ふ、夕雨至り、氣涼し、母の忌日逮夜、連続してくしき夢見る、

なき母を思ふこの夜の夢路にぞ

こゝろのおくをさぐりぬるかな

夢ながら畏嚇誘惑ひだりみぎ

なぎてとほりしあとのさやけき

夢ながらもとつみ親のみこゝろを

あふぎつまもる道見つるかな

三十一日、強き西風に送られて、午後マルセイユに入港、碇泊せる船舶の中に先年大西洋の船路にのりし Patria あり、

かつてあをのせし大船なれもまた

老いはせずやとうち見やるかな

夕と翌朝と上陸して市中見物、此夜早曉四時は日本の正午に當る、

昨年はシカゴにてその時を守りしが、今年はこの港碇泊中にその時を迎へて勤行、

おそろしきかの日の思出年ごとに

ところかへつつさらにわきくる

一日碇泊中風加はり雨を伴ふ、港内の波上に千鳥飛ぶ、

港には船のむれゐるまなかにも

なみに千鳥のたはむれてとぶ

ジネーブの吉阪、土田兩君、その家族を送りて船に来る、一別以來の話しつきせず、吉阪君は飛行して來りしを思ひて、

風にのり送りきましし君にわかれ

われはひとはの船にのりゆく

午後五時船出、西風益す加はる、船はコルシカの島に向つて進む、

ふきしきる風に波の音ともなひて

よるの船路のいつもををしき

島をいで波に身をよせナポレオン

この海のへになに夢みけん

二日正午、サンボニハシヨの海峡、兩島の荒陵を荒海の上に見る、終日西風に追はれて進む、

日影てるあを海原にしろうまの

はするを見ては時すごしつつ

三日早曉、カプリの島の邊より、曉天に聳ゆるベスビヨの噴烟を望みつつ、日出と共にナポリの港に入る、

波くろき潮路のうへに茜さし

ベスビヨのけむりそらにたなびく

ナポリの市街日光まばゆく、坦々の大道に車を驅つてポンペイの廢

墟を見る、

火をはきてあたりやきしも知らぬげに

ベスピヨのふもとゆるやかにひく

石のかべ折れし柱のかなたには

火をはく山のおごそかに見ゆ

午後ナポリの港を出で、翌朝未明メッシナの海峡をすぐ、

こずみなすエトナおろしにまきおこる

くもまにもるるかたわれの月

水とそら墨をながせるたゞ中に

すなごにもにてあかしひらめく

海のきは山のたかみに數しらす

あかしつらなるメッシナの瀬戸

四日、地水海の東部、水紺青を加へ、五日はクレタの島を見てすす

む、

地中海みづ紺青こんじょうのこゝにさへ

かつていくたび血しほながしし

思ひやる世界歴史のこの舞臺

幾多の人のゆききせしあと

使徒パウロ道をひろむる旅にして

この水のへにそらあふぎけん

海原のきはあざやかに沈む日を

日ごと潮路の友とながむる

すばる星東のそらにいでそめぬ

こひしふるさとすゞ風のゆふ

六日、海水のにぐりにてニール河口に近きを知り、夜半サイイドの港に入る、翌七日午後運河に入り、夜半すぎスエズを出でて、紅海に

入る、

ひとすぢの緑の水の砂はらを

とほりてふたつ海むすびけり

東西のさかひ運河の水のうへに

ゲレシヤロマの興亡をよむ

紅海に北の追手強く吹き、シナイの山々を波の上に見る、

紅海のそばだつ岸に波たかく

モゼスのあとは風のそらあひ

そらをつくシナイの山に今もなほ

エホバのみこゑきこゆるや否

波の上はしくならぶ山々は

エホバの民のたゝかひのあと

波の上かなたのそらと思ひやる

シナイとメカのくしきそのあと

九日、北風依然として強く吹くも、暑氣加はり、夜は甲板に出でて
空を仰ぎて立つのみ、

あつしとてなげかざらなん今年はも

夏もしらずて今までへしに

あつき夜のねられぬままに船ばたに

立つわが袖にしほかせのふく

すなごなす天の河原のたゞ中に

オリヨのむれの燦としててる

星あかりそらに光のあはきもと

きはいちぢるく黒きうなばら

天の河ひくくもたれて海のものに

せまるかなたは砂のおほはら

七つぼしひくくかたむきカシヨペヤ

そらにたかくも夜はふけにけり

たなばたは西にむかひつすばる星

たかきもこゝは夏さりもせず

ふるさとは今やあけぼのすばる星

かげうすらぎて風やつめたき

星見ては思ひぞおこすなるふりて

野邊にあかししそのよるのそら

こゝに又思ひぞいづる菩提樹の

葉ごしに見つる伽耶の星かげ

真よなかに人しづまりてひとり見る

無限のそらに寂じやくもく黙の星

あつき夜のあけて東のそらあかし

けふも暑しとしらするがごと

十日も依然北風、暑氣いよ／＼加はり、海水三十三度に上る、

砂原の暑さにしみてそらと海

むしてふきくる潮のあつ海

マンデブの關戸のなかのこの海を

ダンテも歌によみもらしけん

人はみなむし湯の中にあえげども

そらには星のすゞしげに見ゆ

よもすがら星とかたらふ心には

時はつきせずそらかぎりなし

かぎりなくなみゐる星の相ともに

かたらふこゑをきく人やある

むかしより星をながめてくしき世の

すがたえがきし人しのばるる

ねやのうちあせ身にしみてめはさめぬ

やぶれし夢のあとあはくして

十一日、紅海の南端に近づくに従つて、風力よはり、溽暑甚しく、

海水の温度氣温をこゆ、

日かげてるもとにわきたつ潮水を

あびてかもめのねむけさすらん

「地獄の關」Babel Mandeb に近づくに従つて、風は舷上に死し、水

の色さへにこりて、苦熱愈よ加はる、

風ととも海のをみのきえうせて

なまりとかせるにぶ色の海

吹く風のにぶくもおもく又あつく

地獄の瀬戸の名にぞふさへる

そらと海ゆげをみたしてむしぶろを

つくりもなせるマンデブの瀬戸

夕六時、ペリム島の燈臺光り初むる頃、漸く瀬戸をすぎて南に進み、

風物頓に變じて、やゝ苦熱を脱す、

名にしおふ地獄の關をいでぬれば

ひがしにひらく印度おほうみ

名もすごきちしほの海にわかれつげ

かへり見すればこぎりござせり

翌十二日は西南の微風、十三日よりモンスン強く、涼氣著し、

風かはりそらうつ波のしるけくも

きのふにかはるけふのすゞしさ

モンソンの船をおひつつ迫りきて

あたりがちらすたきの白波

めもはるに白波あげて吹きわたり

たゆるひまなきモンソンの風

ふきしきりしめりを含むモンソンの

ゆく手に草木いかにむすらん

わがゆくて楞伽の島に雲むして

しげる林にはたるとぶらん

十三日、右舷にソコトラの島を見る、

石のやりつらなり立てる峯のもと

しらなみよするソコトラの島

新月空にかゝりそめ、船の東すると共に光を加へ、さそり座より蛇座に進む、

三日月のほゝえむ面は夜なよなに

八重のしほぢにはえまさりゆく

古歌のまゝ豊旗雲に入日さし

月はさやけくさそり座にてる

こゝにさへ波にくだくる月影は

すゞしげに見ゆ印度おほ海

風漸くなぎ、空はれて、船上遊戯にぎはひ、日々行事かはりなし、

人みなのははむれあそぶ船の上

これぞ浮世といふべかるらん

きのふけふあかしくらしてすぐしゆく

たびぞ浮世のすがたなりける

ひねもすの汗をあらひて大海に

ながすみそぎを日ごとにぞする

なぎわたる大海原のをちここに

そよふく風のさざなみに見ゆ

色うすみくれゆくそらの海のいろ

そこわたつみの影うつすらん

ロンドンにて贈られし鉢の菊花しほみて、僅に三輪の花をのこせし

を水にいけて、加藤君にいひ送る、

賜ひにし菊のなごりに水をゝぎ

うなばらとほく君おもひやる

船は印度に近づき、十六日早曉ミニコイの燈臺を見る、

月を名におふこの國のおほ海に

ひかりはえます夜なよなのたび

天竺の南のはてのコモリンに

ちかきミニコイあかし見てすぐ

そのかみを思ふコモリンの補陀落の

みてらのあかし船ちてらしし

ふ、
南の方 *Maldivé* の列島、名は *Maladvipa* (瓔珞の島) ならんかと思

玉の絲その名やさしき島々の

そらにかずかず星のつらなる

十八日午前、シイランの島に近づき、漁舟と共に丘陵見えはじむ、

波の上楞伽の島を見ておもふ

むかし求法の僧たちのあと

この島の鬼ものがたり日の本に

くしくも桃のをのこ生みけり

正午コロンボ入港、午後上陸して市中を見、又博物館に新發堀の遺品を見て、夕船にかへる、

牛ぐるまこゝに又見てこの島の

森をたざりしむかしおもほゆ

熱國うじやうに有情非情のはえむして

人はまぢまぢ花もとりざり

いろすがた心まなざしとりざりの

民もひとつの根にやおひぬる

菩提樹のみごりは今にさかえても

のりのいのちのいかにあるらん

菩提樹の一枝をもち歸りて記念とす、

夜船出、西風強し、スマトラ島の北端アチエの岬を見るまで三日間、

同じ追手のモンスン吹きつゞく、(Cumulusを通常積雲とするを堆雲とし、うづ雲と呼ぶ)

いく千里かさねてなほも吹きしきる

風のゆくへをたれにとはまし

むす風の波をばたててゆく末に

うづ雲むれてかさまさりゆく

しほの花うな原ひろくみだれさき

ふなぢにふらす花ふぶきかな

うづ雲のむれつ亂れつをちこちに

雨とそそぎてうなばらをゆく

しづむ日のあとにとりざり雲の色

うつして波のあやゆたかなり

いにしへの長門の海や筑紫瀉

海のうたをば波のうへによむ

その間にも時々時事の電報を見る、

人の世の頼みがたきをたのむこそ

くやみうらみをます心なれ

まさしくも人の心をうつし見る

かゞみをみがく心もたまし

二十一日夕暮前、アチエの岬を眺めて、船は島かげに入る、風物漸くかはる、

モンソンの吹きやむまゝに雲つのもり

あひだに見ゆるいなづまの影

夜はしづか風なぎわたり月おぼろ

潮路たひらに島かすかなり

二十二日、愈よ海峡に入りて暖風ふく、關西風害の報に心をいたむ、午後子供の運動會、雲の變化多く、熱帯の風光益すこまやかに、夜は月光加はる、

紺青こんじょうにこがねしろがね雲ちらし

土佐の繪卷を海のうへに見る

うづ雲の月にはえてる下かげの

くろくみだるる中にいなづま

月にてる雲と水との間には

いなづまふくむ黒雲のむれ

そのかみのキリシタン衆もあふぎけん

マラカの瀬戸にクルス四つ星

夜半すぎ二時頃、東經百度の邊と思はる、おき出でて Sir Charles Elliot 水葬のあとを吊ふ、海面平に、雲間の月光に電光てりそふ、

ひがし西ひかりもとめし君は今

千ひろのそこにおくつきゐます

水の面にしるしなれどこのあたり

君のおくつきたむけてぞすぐ

二十三日朝、マラカの沖、午後五時近く島々の間をすきで、シンガポールに入港、本田光徳氏の迎をうけ、市中を見、椰子林の間をすぎ、ポンゴル内浦の清涼館に遊ぶ、生洲釣堀と家屋と皆海につき出、橋を渡りて之に達す、夕暮のそらに釣を垂れ、忽にして大鯛數尾を得、暫にして満月水をへだてて東山に上る、清光の中に新獲の魚を料にして夕食、誠に天下の清遊珍味なり、

山のはをはなる、月のあからひて

ひるの暑さのなごりとぞむる

月みちぬ波なき浦の水のもの

うつる影さへまるくまごかに

袖の海まごかに見つる月はいま

マラヤのあつき海にうかべり

食後車を驅つてカトンの岬に遊ぶ、月明に波よせて、蟲聲唧々、

月かげにひたれる波のしとやかに

よする岸べにしげき虫のね

宿に歸れば、月は高く潮満ちて、水は床に達せんばかりなり、

内浦にしほみちくればわが宿は

水のかさみにうきごのとなる

夜半おき出て露臺の上に月と海とをながめて時を經、水天渾然、風物總て夢の如し、

しづけくも内浦のうみ月かげを

あびてをちこちいさり火うごく

そらと水四方寂寞じやくまくのまよなかに

月にさめてや鸚鵡ひやうまうなくなり

二十四日朝、めさめて海上のそよふく風を吸ふ、内浦の水、山と森との影をひたして、小舟のゆききに僅に波紋を畫く、

水ぎはに木々しげりあふ海のものに

影をひたせる椰子のむらむら

市中諸方、植物園博物館等を見て船に歸り、本田氏に別を告げて、正午すぎ船出す、軟風に送られて大海に出で、航路東北に向ひて日くる、十六夜の月波にてり、燈臺の光を見る、

いつしかに波の上にて月をへぬ

こゝろは常にしひがしして

いざよひの月に船路のあかるくて

いざこんみなどの思はるゝかな

出港以來常に西方の風に送られて進む、暑さ依然たり、

波間にはこん日のひかり見えそめて

あけゆくそらの海のいろはゆ

二十六日午後、天氣稍變兆を呈し、夕には驟雨至る、

雲くるひすさぶはやてに波わきて

むらさめそゝぐやみの海原

二十七日、颱風の餘波にて天候險惡、萬葉集第二十卷をよむ、

荒海のうへにむかしの防人せきもりの

歌のこゝろを思ひこそやれ

吹かれきて水鳥ならぬもろ鳥の

嵐となみにあはれゆるるる

二十八日、風ややなぎて日光あり、

嵐すぎ波なほたかき海の面に

千鳥にまがふとび魚のむれ

二十九日朝、香港に入港、上陸してピークに上る、三十餘年前初めて此地を経し時は大橋乙羽君等と共に共なりき、當時の同行中故人となるもの半をこゆ、

こゝもまたむかしの跡となき友の

思出とほく海ながめやる

香港を出でてより又々西に去りし颱風の餘波をうけて波高く、溽暑去らず、三十日夜に至りて氣や、清し、

そらきよみ秋のしるしの見えそめて

オリヨにならぶかたわれの月

月は十月に入る、次の颱風又後方であり、風に雨を加へて溽暑再び来る、三大洋の長き船路に初めて逆風にあふ、二日朝、長江の口を進

み、細雨濛々の中に上海に入る、

江の水のにごりは千とせかはりなき

この國たみのこゝろやいかに

年もへぬ修羅のちまたの跡はいま

木々のみごりに雨のそぼふる

上海に碇泊數時間、雨中出港、濁流を航し、夜に入りても尙ほ之を脱せず、風雨一晝夜にわたる、

雲たれて雨ふりそゞぐ海原の

かすめる中にしるき白波

遣唐使八幡船やかずかすの

年へしふなぢけふの荒海

三日夜、家郷と電報往復、

けふとあけきのふとすぎていつしかに
ながきしほぢのはてなんとする
ひがし西へめぐり見ては今さらに

世のうつろひのおごろかるかな

四日未明、五島列島に沿ひて進み、夜あけては、生月、鷹島歴々指
點すべく、松浦瀉の風光を望む、筑紫瀉より赤馬の瀬戸に至る間、遠
山蒼海のながめ、歴史の回顧と共に曾遊の思出に、故國の感切なり、

筑紫がた八重の潮路にたつ柚の

かげをうかべしのりのはちすば

この海をおほひてよせしえびす船

ちりにしあとにのこる水の面

歡樂のちまたの夢を浪枕

見つつたごりし人いまいづこ

わがいもが生れし里を波の上

ながめてゆかしさはのおもひで

薄暮、下ノ關をすぎて瀬戸内に入る、ゆききの船の光り賑ふ、夜半
すぎおき出でて暗中来島の瀬戸を見る、

風なきに波たつせとの早しほを

わけゆく船のこゝろををしき

よるのそら島影くろく水のおも

くらきが中にたぎつ瀬戸波

崎をめぐり瀬戸をよこぎり左みぎ

あかしをわけてすゝむわが船

船をさの心づくしに瀬戸の内

めぐる潮路をやみにすぎゆく

夜あけて讃岐の沖に、屋島、五剣山の眺を恣にし、淡路島をこえて

高野山の八葉峯をのぞみ、午をすぎて神戸に着港、迎をうけて、姪節子の家に入り、薄暮京都に着く、此日亡父の祥忌、去年は太平洋を横ざりて京に歸り、今年は故郷に入りて、微雨の中に東山墓所に詣づ、國々をめぐりてこゝにふるさとの

親のみはかべ子はかへりきぬ

五十とせのむかしのこの日しのぶかな

父うしなひしをさなごゝろを

百二十日の旅路、總て過去の夢に入り、雨濛々の中にながむる洛東在家のあかり、これ亦千年の夢を藏す、

風あつき潮ぢは夢とふるさとの

山べにしげき虫の音をさく

影あはく雨ににじめる東山

夢にちとせのあとつつむかも

国立国会図書館

昭和九年十一月七日印刷納本
昭和九年十一月十一日發行

(非賣品)

著作兼
發行人

東京市小石川區白山御殿町一一七
姉 崎 正 治

印刷人

東京市麴町區内幸町一丁目四番地
秋 本 宗 市

印刷所

東京市麴町區内幸町一丁目四番地
株式會社ヘラルド社

